リトル・ガーデン

風音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトル・ガーデン

【Ｎコード】

Ｎ８１７１Ａ

【作者名】

風音

【あらすじ】

完璧人間緋水杏子。子供大好き結城翔太。クールビューティ陰満文月。人の数だけ人生はあって、複雑に絡み合ってやがて一つの大きな物語になる。高校生活を軸にした、ロード・ストーリー。現在は「文月の場合」です。「杏子の場合」はそのうち行間空けたり加筆修正したりします。

「世界は、いつか壊れる」

幼い頃から、器用な子だとよく言われた。

物心ついたときから、私の周りの人は私に賛美の言葉ばかりをかけてくれていた。

勉強が人並み以上にできた。

運動も美術も成長すれば人並み程度だったけど、当時は一際目立っていた。

ただ、他の人と何よりも違ったのは、一度聴いた音楽は忘れずに、あらゆる楽器でその音階を再現できることだった。

正直に言う。私は自分のこの絶対音感の力を誇りに思っていたし、なぜみんなはこんなこともできないのだろう、と思っていたときもあった。

それが自惚れだとは知らずに。

私の父は会社員で、母は保育士だった。

普通の家庭。普通の両親。

そこから生まれてきた「非凡」な才能を持つ私をどう思ったのだろうか。

幼い頃の私が賞賛されている記憶しか持たないのは、親の存在が一番大きい。

親にとって、私は誇りだった。

私にとって、親に誉められることは誇りだった。

利害一致。

だから、必要以上に、盲目的に努力した。親に誉められるために。勉強もたくさんした。テストではいつも百点を取ろうと心がけていたし、先生が少しでもひねった質問を出してくると、意地でも答えられるように努力した。運動神経はもともと良いほうではなかったけれど、逆上がりだって上り棒だってあらゆる球技だってできるようになるために本を読んだり努力を欠かさなかったし、少しでも早く走れるようになるために毎日三キロ、小学校高学年になる頃には毎日五キロ走ったりした。今では考えられないことではあるが、当時は生真面目な性格だったと自負してるし、何よりテストや運動会などの行事で親の喜ぶ顔を想像するのが嬉しくて楽しくてたまらなかった。

つくづく親孝行な性格をしていたと思う。

そんな涙ぐましい努力の成果もあり、小中学校は他の親が羨むほどの成績で通過する。そして、住んでいた地域での一番の公立進学校へと入学した。私立へ行かなかったのは、親に金銭の面で迷惑をかけられなかったからだ。努力に場所は関係ない。本に出てくる有名な人のほとんどは裕福暮らしなどしていなかったのだから。

だが、高校へ入学してから明らかになり始めたのは、自分の精神面の幼稚さであった。

高校一年の、六月のことである。

まず、教師の反応だった。

私だって人の子だし、失敗だってする。しかし失敗したところがいけなかった。

よりによって、高校はいってはじめての中間テストで大コケをしてしまったのだ。

自慢するつもりはないが、入学テストを一桁の順位で通ってきた私が、中間テストで二桁の順位を取ってしまったことに、教師陣は何を思ったのだろうか、テスト終了三日後に生徒指導室に呼び出された。

中年で、眼鏡をかけていてひょろひょろで髪の毛の量からいかにも苦労してるなぁ、と感じさせる学年主任の男性教師曰く、「君は将来有望なのだから、変なことにかまけてないでしっかり勉強しなさい」的内容のお説教をぐちぐち三十分以上もされてしまった。お説教などまるで受けたことのない私だから、これには懲りた。……といいたい所だが、これがいわゆるお説教なのか、とある意味第三者的視点から場の状況を読んでいた辺り、可愛くない高校一年生ではある。

変なことにかまけてるわけない。単に緊張しただけだ。もともとの根が小さいと自分で判っていたし、失敗したなぁとも感じていたわけで、人に言われなくても判っていたつもりだったわけだ。つもりだったけれども、よりによって学年主任が親にすべてのいきさつを話していたと知ったときは血の気が引いて、このまま倒れてしまいたいと思ったくらいであった。

そして、親の言葉は、私を破壊することとなる。

「杏子」

緋水杏子は肩をびくりとさせて、父親の向かい側のソファに座った。

父が帰ってくるのが今日は嫌で嫌でしょうがなかった。夕食もろくに喉を通らなかったし、勉強の内容も頭に入っているのか疑問に残る。母はいつもと変わらない態度だったけど、内心怒っているのではないかとびくびくして夕食以外は部屋に居た。いつもならこの夜八時という時間帯は近くの河川敷を走っているのだが、今日はとてもそんな気分ではない。

「中間テスト、残念な成績を取ってしまったそうだね。先生から聞いたよ」

座ったはいいものの、合わせる顔がなかった。わざわざ直接親に言ったあの学年主任を怨みたい。髪の毛を笑いながら一本一本なくなるまで抜いてやりたい。

俯いたまま顔を合わせようとしない杏子に、父はさらに投げかける。

「別に怒っているわけではないよ。こうして話そうと思ったのはね、聞きたいことがあるからだよ」

「聞きたいこと？」

親が怒っているわけではないことにホッとしたのと、急な話題転換に、思わず聞き返してしまう。

父は、茶色の縁の眼鏡のレンズの奥から杏子の心を見透かすようにして、こう問いかけた。

「君は、頑張りすぎてないかい？」

「…そ、」

すぐには否定できなかった。

「そんなこと、ないよ」

「本当かい？」

「ほんと」

今度はすぐに返すことができた。

「お父さんはね、杏子のことをすごく誇りに思っているよ。親思いのいい子だって。けどね、杏子が無理しているような気がして。お父さん達は君に君の能力以上の期待はかけてはいないから、学校の成績を必要以上に気にする必要はないよ。ただ、杏子が他の子よりも強く縛られてはいないかとお父さん心配になってね――」

そこで父は言葉をつぐんだ。いきなり杏子がソファから立ち上がったからだ。

「――杏子？」

瞬間、ドタドタドタとものすごい足音を立てながらリビングを後にして、階段を上って部屋に入って鍵をかけてベッドに飛び込んで枕を抱きしめる。

何がなんだか判らなくなった。

なんで私はいい成績をとっているのだろう。

なんで私は優等生でいるのだろう。

なんで私はこんなにいい子で頑張っているのに、お父さんはあんなに悲しそうな顔を見せるのだろう。

次に、クラスメートの反応だった。

進学校というものは、「頭のいい」生徒というものが集う。当たり前ではあるが。

概して、頭のいい者の中には、プライドの高いものも多い。小中学校では頭が良かったが、いざ高校へ入学すると大したことなくて、それでも変なプライドが残って「できる」人を妬むような手合いは必ずいる。

悪いことは重なるもので、杏子はそのような輩の標的にされてしまったのだ。

杏子の普段の態度も良くなかったのかもしれない。外見は幼い頃からの修練で並以上、バレンタインには十数個の本命チョコを毎年ギブされるくらいで、品行方正物腰柔らかのお嬢様系であり、陰湿な陰口を代表とする女の醜い部分にも参加せず、加えて学年トップクラスの学力を持つという目立った部分があったのでお高く留まっているように見えたのかもしれない。杏子の通う学校は決して女性オンリーではないので言い切れないのだが、朝来ると机にラクガキがしてあったり花の挿してある花瓶が置かれていたり物がよくなくなったり昼食を一人で食べたり自分だけ移動教室の場所を自分だけ間違った場所を教えられなかったりするところを見ると、同じ性別の生き物がやっているのだなぁ、と思う。

私は心の強いほうではない。

環境の変化はあっけなく私の心を壊し、私を灰色の世界へと誘うきっかけとなってしまう。

父と話した次の日から、私は全てのものが灰色に見える世界で生活することになる。

一週間が過ぎた。

目覚めは悪い。ここ最近が特にそうだったが今日は特にひどい。体調だって別段悪くないはずだし、あれだった日にち的にまだのはずだ。

となればそれは精神的な問題なわけであって。

両親は私が壊れてしまったことに対してどう接すれば良いのか判らないらしく、「保留」という名目の元に私と距離を置いていた。

まさか学校で私が暴れて停学になるなど、思ってもみなかったのだろう。

私は小さい頃から良くできた子供であったし、親にとっても手間のかからない子供だったわけで、このような子供の心の問題を扱うのは初めてなのかもしれない。

ベッドから体を起こす。吐き気と頭痛が治まらない。相当まいっているのだなぁ、と自分でも判る。

どうすればいいのか判らなかった。

判らないからもう一度体を横にして頭痛と吐き気に身を任せる。こうしていたって解決策が出てくるとは到底思えない。
けれど、世界を見失ってしまった私にとって動きたくないというのは正直な気持ちであった。

少し前までの私は、「両親に誉められること」で自分の世界を保とうとしていた。私と両親が満足すれば、それで万事ＯＫ、何も心配要らない。
できれば、気づきたくなかった。このままずっと、この世界に溺れていたかった。間違っていると、気づきたくなかった。

目に熱いものがこみ上げる。受け身でいるほど私は馬鹿ではない。クラスの雰囲気から、私のリアクションを見て走らせる他人の視線から、一連の出来事の首謀者は特定できた。それからは実力行使だ。いつもの様に登校したとき、いつものように花瓶が置かれてるのを見て、理性が吹っ飛んだ。首謀者をにらみつける。彼女はたじろぐ、まさか自分が首謀者であると気づかれるはずはないと高をくくっていたのだろう。つかつかとまっすぐに彼女の目の前にまで歩いて、ぐーをその頬に捻りこんだ。椅子に座っていた彼女はそれだけで床に叩きつけられる。少しだけ、胸がすっとした。
クラスの誰もが呆然としていた。私がこんなことをする人物だとは思っていなかったのだろう。静寂に包まれる教室の中で、殴られたというのに一人だけ状況を理解できていない彼女はくぐ籠った声を出して置かれた状況を知ろうとしている様だった。
それからは早かった。誰かが教師に言いつけ今度は親と一緒に二回目の呼び出し、事情説明、結果様子見ということで首謀者と一緒に仲良く一週間の停学処分となった。

今朝は、停学三日目だ。

のそのそとベッドから這い起きる。もう両親は二人とも出勤してしまった時刻だ、こそこそしながら自分の部屋を出る必要はない。どんな風に接すればいいのか判らない親と話すのは気が引けた。吐き気はだいぶ治まっていたが、頭痛の酷さは相変わらずであったので頭をおさえながら部屋を出る。リビングに行くと、ラップに包まれた朝食がテーブルの上に置かれていた。

本当、迷惑をかけていると思う。

テレビをつけても画面に映るのはくだらないニュースばかりで、私の心を繋ぎ止めてくれるものは何もない。

不確かだ。目に映るもの全てが不確かだ。自分の足元が油断すれば崩れ落ちてしまうような感覚。

じっとしていられなかった。

女性にあるまじき速度で身支度をして、日焼け止め対策をしたTシャツとジャージ姿で家を出た。

――ふと頭によぎるのは、冬の夜。

しんしんと積もる雪の中で、幼い私は裸足で誰かを待っている。ここはどこなのだろう。私は誰を待っているのだろう。

決まってそう思ったときに、記憶は雪に埋もれて見えなくなってしまう。

本当にあったのかどうかすら定かではない、白き記憶。こうして

ぼんやりとしている時に小悪魔のように頭をかすめるのだ。

今の私では、決して捕まえることのできないもの。

「ふぅ……」

ノルマである五キロを走りきった私は、公園のベンチでしばしの休憩を取っていた。二日ほど家に閉じこもっていたので少し疲れたが、今朝からの悩みであった頭痛はなくなったようだ。気分で走ったのだが思わぬ効果は嬉しい。

夏も近い。そんな日に冬の日のことを思い出すとは私もなかなかである。街で公園を見渡しながらため息をついた。

午前中のこんな時間では児童公園にいるのもほんの小さい子供とその母親達だけだ。今頃は若い者は学校で一生懸命お勉強だ。

そもそも私は、小学校のとき「友達」と公園とかで「遊んだ」ことがあるのだろうか。ないような気がする。

文字通り、一生懸命にお勉強してたのだ。

結果が、これだ。

唇をかみ締めて、目を静かに閉じる。頬をなでる初夏の風は優しかった。

目を開ける。もしかしたら、私はあの頃から世界が灰色に見えていたのかもしれない。世界には色があるものだと、私にも色があるものだと、そう思い込んでいただけなのかもしれない。だとしたら、笑えるくらい傲慢だ。

空を見上げる。日陰のベンチの上にあるのはこの公園で一番大きい木で、木漏れ日が嫌に眩しかった。

「――え？」

誰かいる。

目を凝らさなければ良く判らないが、木の枝に誰かいる。幼い子供ではない。どちらかといえば、自分より少し下、あるいは同学年くらいだ。木漏れ日が眩しくて判別がつきにくい。

あんな高いところの枝にどうやって上ったのか、とか折れないのかな枝、とかくだらないことを考えすぎて根本的な疑問が出てきたのは一番最後だった。

誰だろう。

なぜか、話しかけてみようか、という気になった。人付き合いに関してはこと消極的な私にとってはどえらいことだ。きっといつもと生活の仕方が違っていたし、時間帯的に有り得ない人物がいることに興味と好奇心がおそらく勝ったのだ。

「――あの！」

枝の上にいる人物に向かって思い切って声をかける。その人は足元にいる私に向かって、

「ん？　なんだ騒々しいな」

機嫌の悪そうな男の声を降としてきた。こめかみがピキッと音を

立てたが、顔には見せずあくまでお上品に、
「そんなところでなにをしてるんですか？」
「見て判らない？　昼寝だよ、昼寝」
判りません。
どうしよう、明らかにこちらに敵意を向けている。会話が続かない。困った。同時に、この声をどこかで聞いたことがある、とも思った。ごく身近なところで。
彼も同じことを思ったらしく、「あれ」とつぶやく様に言ってから、
「お前、もしかして緋水のお嬢様か？」
不愉快だった。
「……そうですけど」
「なんだなんだ。いいのか？　停学中に出歩いて」
誰だか判った。「別に良いじゃない」とぶっきらぼうに言ってから再びベンチに腰を下ろす。無駄に興味と好奇心を使ってしまった。
「まあ、そうつっけんどんに言うなって」
「つっけんどんって……あなた、一体いつのじだ」
大きく葉を揺らして木が揺れた。刹那、驚くほど静かに、枝にいた住人、結城翔太はベンチの側にいた。

――私達のこの出会いは、様々な人たちを巻き込む「人生」という名の一つの歯車となる。
しかし、今はまだこの出会いが重要な出来事だなんて二人とも知らない。

ただ私は、

「きゃ、きゃーーーーーーーーーーーっ！！」

とあまりの驚きに大声で叫んで幼い子供とその母親の注目と笑い声を得ることになる、最悪の記憶として焼き付けられるのである。

「これはきっと、始まり」

驚いたなんてもんじゃない。

普通あんな高いところから飛び降りたらもっとこう「どすん！」とか体重と重力のかみ合った相応の音がするはずなのだ。

静かに私のそばに降り立つなんてありえない。こいつ、漫画のキャラか何かか？

一通り叫び終わった後も私の頭の中はぐるぐると回り続ける。翔太はそんな私を腹を抱えて笑いやがった。

「あははは！　なんだ、お前面白いな！」

「は？」

「もっとすましたやつかと思ったけど、案外普通なのな。木から飛び降りたくらいでそんな驚くなんて思っても見なかった」

白い夏服を光らせてげらげらと笑う翔太に、再びこめかみがピキッ、と音を立てるのを覚える。

「わ、悪かったわね。……みんなが思ってるほど、私は綺麗じゃないわよ」

「違いねぇ。つーことはなんだ、学校だと猫被ってたってことか？」

一瞬反応に困った。猫被ってたわけではない。親に迷惑をかけないためには、真面目でいるのが一番手間がかからなかったのだ。

あれ？

じゃあ学校での私、親を前にしたときの私は本当の自分なのだろうか？

それは違う。　私はさっき真面目で居続けたと自覚したではないか。……ならば、本当の私は一体何者なのだろう。

「……おいどうした。そんな難しい顔して」

気づくと腰を屈んで私を見る翔太の顔が目と鼻の先にあった。

「ひゃ、ひゃっ」

反射的に顔を後ろに引っ込める。彼は非常に気分を害された、という顔をして、

「んだよ、言っとくが俺はそこら辺の男より顔には自信があるんだぞ」

悔しいけど、彼の言い分には正当性があった。男女問わずその中性的な顔立ちと細身の体型は人気が高い。認めているからこそ、不用意にその顔を近づけられたのが恥ずかしくて腹立たしかった。

「あ、あのね、誰だってそんな顔近づけられちゃ驚くに決まってるでしょ。プライベートスペースって知ってる？」

「あぁ、悪いな。常日頃こんなんだから。ちなみにその言葉は判る」

彼は再び腰を伸ばし、指で「隣いいか？」と聞いてきた。断る理由もないので右に避けてスペースを作る。

「……で？」

「ん？」

間が持たないことを予想して、彼が腰を下ろしたら間髪入れずに話題を切り出す。

「なんでここにいるの？　学校は？」

「親みたいなこと聞くのな。結城くんには結城くんなりの都合があると思うし、訊かないでおこうかな、とか思わないわけ？」

「私、そんな配慮できるほど人付き合いも人間もできてないから。言うのが嫌だったら無理に訊かないけど」

「や、ただのサボリだけどね」

……こいつは。

「……しかしまぁ」

彼は私をまじまじと見ながら、

「緋水のお嬢様の私服がそんなのとは思わなかったなあ。もっと上品なの着てるかと」

白いTシャツに学校指定のジャージを着てるのを見て、結城はにやにやしながら言った。なんだか急に恥ずかしくなって、

「違うわよ！　今はジョギングの休憩中なの！　普段はもっとマシなの着てるわ！」

すると彼はもっと驚いた顔をして、

「女性って大変なんだなぁ」

と呟いた。

「違うわよ」

砂場でトンネルを作ってる子供を見ながら、私はぽつりと言った。聞こえることを期待してなかった。けれど彼は聞き返す。

「何が？」

「すべての女性を知ってるわけじゃないけど、私だけじゃないかしら。家に帰ってからずっと勉強して、休憩時間は河川敷を走って、美術や建築関係の本を読み漁ってるのは」

結城は訝しそうな顔をしながら、

「……ま、人の人生なんてそれぞれだし、お嬢様がよければそれでいいんじゃないの」

人の言葉というものは時に無意識に、暴力以上に相手を傷つける。

「じゃあ」

気づけば震える声が転がりでていた。

「私がよくなければ、私はどうすればいいの？」

「は？」

言葉の意味を捕らえきれなかったらしい。自分の言った言葉と私の言った言葉を頭の中でよく咀嚼してから、

「おまえの今送っている生活は、誰かに強制されてしてるのか？」

首を振る。彼は頭が良く回ると思う。こういう人は話していて非常に気分がよい。

「違う。でも私の意志じゃなかった、のかもしれない」

結城の顔に疑問の色が一杯になった。当たり前だ、言ってる私でさえ、自分の言葉の意味を理解しきっていないのだから。

そう、私の言い草は、まるで、

「……二重人格？」

いいえて妙だ。

砂場にできた大きな山。青いつなぎをきた小さな男の子は、母親に手伝ってもらってトンネル開通を実行しようとしている。

「面白いな」

声に反応して彼の方を見ると、こちらを覗き込むような目で見つめていた。　あんまり見つめられたことなんてないから、背中がむずむずする。

「面白いって、私は別に全然楽しくないわよ」

「だろうな。いや、お嬢様みたいな完璧に見える人間でも欠けてる部分があるのかと思うと面白い。やっぱ人間なんだな、て思える」

「……」

この人は私をどういう風に見ていたのだろう。

どう接すれば判らないので、顔を背けて頬杖をついた。男の子は小さい手で砂の山が崩れないように、慎重に、でも豪快に穴を掘っている。山が崩れないかと見ているこっちがひやひやもんだ。

思う。

私は公園でトンネル開通などしただろうか。根本的な思い出というものが、私には欠けている気がした。

「……あなた、なんで学校さぼってるの？」

「勉強が嫌いだから」

「何それ」

私は砂場を見つめながら口だけで笑う。

「勉強が嫌いなら、なんであんな進学校にはいったのよ。矛盾してるわ」

「世の中にはな、学力だけでは推し量れないものがあるんだよ。俺の場合はそれだ」

結城は偉そうに、でも面白くなさそうに言った。

不思議な人だ。話してて、どこか安心するようなところがある。

「けどま、」

彼は立ち上がって大きく伸びをした。ついでなのかうおお、と聞いてて気の抜ける叫びをあげる。

「お嬢様に心配されたら行くしかねぇな。こりゃ他の奴らに自慢できるぞ」

「学校、行くの？」
「おう」
「……そう」

すっきりしない思いが胸に残る。自己分析するまでもない。あんなことをやらかした後の生徒たちの私への反応がどういう風になっているのか気になっているのだ。そして多分、私にとって気分の悪い結果になっていることも予想している。
私のそのような思いを汲み取ったのか、結城はきびすを返しながら、
「……俺的にはあれくらい気にすることじゃないと思ってる。ただ、」

左腕を挙げる。

別れの仕草。

「俺的には今日のお嬢様の方が、接しやすくて良かったぜ」

よせばいいのに、私は去ろうとする背中に不機嫌な声をぶつける。

「ちょっと」

背中は振り返る。

「そのお嬢様っての、やめてくんない？　不愉快だわ」
「……なんだ」

彼は心底驚いたという顔をして、

「他の奴らがこう呼んでたから、なんだ、呼ばれるのが嫌なら初めからそう言えばいいのに」

「……なんか、急に嫌になったの。だからやめて」　自分でもよく分からない心境の変化だった。しかし彼は私に今まで見たことのないような優しい微笑みを見せて、

「そうか。……よかったな、緋水」

と、また背中を向けて去ってしまうのだった。

顔が赤くなっているのを感じる。額を押さえながら、

「……あの笑顔は反則でしょ……」

世界が、色づき始めていた。

「仮初めの一時」（前書き）

センター前にちみっと描いてみました。
携帯からなので文法危うい点ございますが、すべてが終わったら修正します。きっと。たぶん。

「仮初めの一時」

停学六日目。

六日目となるとこの生活にも慣れてきて、相変わらず両親と距離はあったが二人が仕事に行くと下に降りてきて本を読んだり学校で行われているであろう勉強をのんびりとやっていた。　たまにまだ、なんで私は勉強をしているのだろう、と思うことがある。その答えはまだ見つからないけれど、見つからないなら見つからないで別にいいんじゃないかと思うようになっていた。

馬鹿らしいほど前向きな考え方である。きっと、世界が色づき始めていたおかげかもしれない、という捉え方もある。

「……」

右手で走らせていたペンの動きを止めて、両手で頬を押さえる。

熱い。

「……なんだかなぁ」

目を閉じて一人ごちる。今まで男性に興味など持っていなかったのに。

今まで見たことないような笑顔。中性的で、少年とオトナらしさが調和した笑み。

落ち込んでるときに優しくされるとコロッといってしまうと本で読んだ時はくだらないと思ったものだが、案外馬鹿に出来ないものらしい。

証拠に、明後日からの復学を心待ちにしている自分が胸の隅っこ

にいた。

今までにない感覚。

……しかし、復学した後どういう風に過ごそうかという問題は依然として残る。殴った相手と今後いい関係は作れないだろうと思う。ただ、いきなり面を殴るというバイオレンスなことをした点については謝っておこう。

私はペンをくるりと持ち直し、リーダーの翻訳に戻った。

お昼に酢豚を中心とした中華を食べ、読みかけのミステリー小説をソファに寄りかかって読む午後は、我ながら優雅である。紅茶なんか飲んじゃったりするのも、停学者とは思えないほど優雅だ。

……しかし、その優雅な一時は玄関のチャイムとともに破られた。

ぴんぽーん。がちゃ「おじゃましまーす！」どたばたどたばた！！

午後の静寂をあっさりと突き破る音に思わず本を閉じ、玄関からリビングへ繋がるドアを凝視して身構える。

……このどこから注意していいか判らない無礼すぎる人物は一人しかいない。

「おねーちゃん！！」

彼女はドアを開け、叫び、ソファに座る私にめがけて正確に飛び込んで来た。

私は目を丸くして、とにかく何とかしようと思い、

「ちょ、ちょっとタンマ、ストップストップ！！」

遅かった。彼女は問答無用で私に抱きついた。否、ボディアタックをかました。

体重の重みでのしかかった肘が腹にねじ込まれた。つくづく思う。女性だって体重はある。羽のように軽いわけではない。男子諸君に力説しておきたい。そこらの男子より鍛えてる私が言うのだから間違いない。幻想を持ってはいけないのだ。

「もー、お姉ちゃんならいつかやっちゃってくれると信じてたよ！」

「判った、判ったからしがみつくのやめて、苦しいから」

なにがなんだか全然判っていないわけだが、これ以上ソファに横になって彼女が声を発する度に胸に振動が伝わってくすぐったい気持ちになるのも、バタ足がすねに当たって痛いのも勘弁だった。

「あ、ごめんねごめんね。つい嬉しくて」

彼女――緋水奈江は胸からがばっと顔を上げて私の目と鼻の先で嬉しそうな、それはそれは嬉しそうな笑顔を向けた。

「……なにがそんなに嬉しいのよ」

奈江の肩を持って起きあがり、マウントポジションから解放される。

「はー……。全く、髪もこんなにくしゃくしゃにしちゃって」

ソファから立ち上がって、鏡台からくしを取って戻ってくる。
「……あなたは」
思わず額を押さえた。
「制服に皺が付くからソファでごろごろしちゃだめってあれ程……」
「えー？　だってごろごろするの好きなんだもん」
「恥じらいを知りなさいって言ってんの」
奈江を起きあがらせて隣に座り、背中を向かせて髪をすいてやる。鴉の羽のように黒く、中学校の校則に違反しない程度に肩に掛かった髪は流れるようで、女の私から見ても羨ましい髪質である。
なのに当の本人と来たら。
「もう中学三年なんだし、少しは外見に気を使ったら？」
「む、聞き捨てならない発言。これでも私、学校だとすごい清楚でいるつもりだよ」
「余計タチ悪いわよ」
「はは、お姉ちゃんに言われちゃおしまいだー」
ころころと彼女は笑う。どういう意味だ。
「悪いけど、私は常に外見には気を使ってるから」
「嘘つきー、私と話してるときのお姉ちゃんと学校にいるときのお姉ちゃんにはかなり差があるよ」
「……あなたに気を使ってもしょうがないでしょう」
奈江は「それって差別ー」と後ろから見て判るくらい判りやすく

頬を膨らませて機嫌を損ねたふりをした。

一つ下で陸上部所属の彼女は、私の従姉妹であり、小さい頃から姉妹同然の付き合いをしてきた幼馴染である。こうして普段ちょくちょく遊びに来ては私の生活を見事にかき乱してくれるのだ。

「お姉ちゃん学校だと堅物さんに見えたから、もっと今みたいに自分に素直になればいいのにー」

「……素直？」

ふと髪をすく手を止める。

素直って、どういうことだろう。

少なくとも、私は素直に生きているつもりである。素直、というのは自分の欲望にまっすぐと言う捉え方をしているが、奈江の言っている素直と私の素直では、どこか微妙なズレがあるように感じた。

「お姉ちゃーん、手が止まってるよ」

「あ、ごめん」

奈江が足をパタパタさせて催促するのであわてて手を動かし始める。しかし足をパタパタさせられるとやりにくいので、「動かないで」と押さえつけた。

もう中三なんだし、もう少し落ち着きを持って欲しい。……私より綺麗な髪を持っているのだから。

「はい終わり」

「ありがとー」

奈江は振り向いて、

「お姉ちゃん、もっと落ち込んでるかと思ってた」
「……なんで？」
「ほら、なんだかんだ言ってもさ、こういうことって初めての経験でしょ？　お姉ちゃんが人殴るなんて、びっくりだもん。私最初聞いたとき信じられなかったし」
「……確かに、初めてだ、人殴ったの」
「でしょ？　だからお姉ちゃん普段優等生気取ってるし、誇りにキズとかついて落ち込んでないかなって」
「……なるほどね」

そういう捉え方もあるか。
確かに私は前ほど壊れてはいない。
なぜだろうかと思えば、私が思っていたほど、自分の世界は脆くなかったことに起因する。
当たり前だが、私が真面目でいなくても、日々は動くし、私は生きるし、両親は働くのだ。

――それに。

私は頭をよぎる邪念を途中で捨て去った。
気づいたこと。気づかなければいけなかったこと。
自分の世界に溺れてばかりいないで、私を取り囲んでいる世界を落ち着いて見つめ直してみること。
きっと私がすばらしいと思っていた以上のものがある世界。
私は今なら、自分の世界の根元の扉を、なぜ私はこんな私になったのかという暗く白き雪に閉ざされた扉を開けられそうな気がした。
「――ちゃん。おねーちゃん」
―が、その扉へとかけた手は奈江の言葉によって再び引き戻され

た。私ははっとして訝しそうに私の顔を覗き込む奈江の顔を見る。
「ぼーっとしないでよ。思考の深みにはいるのは一人の時にして」
「……ごめんなさい」
悪い癖だ。考えすぎと奈江によく言われる。『人間直感が一番だよ』とは彼女の弁だが、果たしてそれはそれで人間としてどうかと思う。
「よし、髪も整ったし、なんかして遊ぼ！」
「私今停学中だから外出歩けないんだけど」
上に来すぎて男子諸君には目の毒になるであろう健康的なふともが見えているので、スカートを直してやる。もう少しで中が見えるところだ。どうせ短パンか何か履いているのだろうが。
「むー、何でこの家にはＴＶゲームがないのかなー」
「私がしないからよ、じゃあチェスか何かでも――」
ぴんぽーん。
「……今日は客の多い日ね」
私は玄関の方をみながら呟く。回覧板か何かだろうか。
「私見てくるよ」
私の返事を待たずに、奈江は玄関へと走っていったが、すぐに戻ってきて、

「お客さん。お姉ちゃんに」

と、不思議そうな顔で言った。その顔にはありありと『お姉ちゃんにお客さんなんて珍しい』と描かれてある。私の顔にも同じものが描かれているだろうが。

「……判った」

誰だろう。

そう思いつつ玄関に出ると、思いも寄らない人物がそこには立っていた。

おそらく地毛であろう栗色の髪は背中まで届くほど長く、私を見つめる目は切れ長で、理知的なものと同時に人間的な冷たさも感じさせる。

「こんにちわ」

距離を感じさせる声だった。

「……こんにちは」

日常の挨拶なのに、恐ろしいほど滑稽だ。

私をいじめの被害者にしたてあげた相手。

私の停学の原因を作った相手。

陰満文月が、そこに立っていた。

「気の向くままに」

時計の針の音がやけに大きく聞こえる。
目の前には、定額の一因となった影満文月がテーブルを挟んで座っている。

両者無言。

息が詰まる思いだ。
どう切り出していいか、私は目の前の彼女を見つめるばかり。
なぜかつまらなさそうな目で、文月は私を見つめるばかり。
ああ、無常にも時ばかりが過ぎていく。

焦る。
私の優雅な午後はどこへ行った。

と、私と文月の目の前に氷と麦茶入りのガラスのコップが置かれた。

「粗茶ですが」

いろんな意味でこの発言に突っ込んでやりたい。だがそれも叶わず、私は黙ったままで神妙な面持ちで右の椅子に座った奈江を見ていた。

再び無言。

――ああ、もう耐えられない。

無意識に手がコップに伸びた。きっとこの緊張状態で生じた喉の渇きを潤そうとしての行動だろう。それに胸に渦巻く喚き散らしたい思いを沈めようとしたのだと思う。
コップに口をつけて、どうせ味など感じないし一気に飲み込もうと思って、
「何をそんなにびくびくしているの？」
飲み込む寸前に吐き出しそうになった。こくん、と喉を鳴らしてコップを置き、出来るだけ穏やかな笑顔で、
「そんなこと、ないですよ」
「そう？　嘘が上手いわね、相変わらず」
『相変わらず』とわざとらしく付け加えているあたり、私に明らかな敵意を向けている。視線がすでに刺々しい。
奈江なんてどうしたらいいか判らないらしく、麦茶をずっとすすっている。
「……あの、何の御用でしょうか？　停学中はあんまり出歩かないほうが」
私が言えたことでもないのだが。
「問題ないわ」
一蹴された。
「わざわざ住所まで調べてここに来たのわね、一応謝っておこうか

と思ったからよ」

個人的な見地から言わせてもらうと、目つきとか『一応』とかのおかげでとても謝りに来たなんて言い分信用できない。

文月は指を組んでテーブルに肘を立てる。

「まさかあなたの洞察力があんなに鋭いとわね。ただのボンクラお嬢様じゃなかったってわけか」

「……ボンクラ」

……もはや突っ込む必要もない。

張り詰めた雰囲気とは逆に、出された麦茶をそれはそれは優雅に飲む文月。

「あとね、どうしても言っておきたいことがあって」

「…言いたいこと？」

「ええ」

文月は麦茶を飲み干して一言。

「大嫌いなの。あなたのこと」

カラン。

テーブルに置かれたこっぷの中の氷が、冷ややかな音を立てた。

いやまぁ、判っていたけれど、口に出さないわけにはいかなかった。

「……え？」
「あら、聞こえなかった？　私は、あなたのことが嫌いだって」
「いえ、聞こえましたけど……」

なんという人だ。私の家という完全アウェイな状況の中、ここまで自分の思うがままに振る舞うとは。

「えっと…、それを言うことでいったい何を」
「自己満足よ。嫌いな人に嫌いって言うと胸の中がすっきりするでしょう」

サドっ気たっぷりな発言だ。
何も切り替えせずに手をこまねいている私の様子が余程おかしかったのか、文月は優越感を漂わせた笑みを浮かべ、

「だってあなた、気持ち悪いんだもの」

あ。
なんか胸に刺さった。

「周りの人はみんなあなたのことを優雅なお嬢様タイプとか何とか言ってるけど、鈍感にもほどがあるわ。あなたの奥底には、つまらない虚栄心と見栄しかない」

彼女の一言一言が、胸の一番刺さってほしくないところに刺さってくる。

「見てて気分悪いのよね。そういうの」

もはや返す言葉もない。
……私は判る人にはそのように見られていたのか。
少々ショックだった。こうして面を向かって言われたのは初めてだが、今までの学校生活、同じように判る人は何人もいたはずだ。そんな人たちにどう思われたかと思うと、背筋が寒くなった。
どうしてだろう。人の目など気にしていないつもりだったのに。
私は親の笑顔を見れていれば万事ＯＫなのではなかったのか？

とりあえず麦茶を飲んで落ち着く。私は今どういう顔をしているのだろう。
文月の顔など怖くて見れないから、テーブルの木目に視線がいく。
ため息をつく。でもまあ何もそんなに

「何も、そんなに言わなくたっていいでしょ！！」

机をたたきつけて、奈江が立ち上がった。彼女の迫力にびっくりして奈江を見る。さっきの緊張感などなんのその。目が怒りに燃えていた。

――心なしか、少し赤くなってる気もしたが。

「黙って聞いてれば大嫌いだの気分悪いだの、アンタ一体何様のつもり！？　誤りに来たとか言ってるけど、用は単にケンカ売りに来ただけでしょ！？　お姉ちゃんが殴ったのは正解だった。お姉ちゃんのこと何も知らない癖に、知ったような振りして満足してんじゃねぇ！」

どうしよう。奈江がキレるの初めて見た。しかもこの子、言えば言うほど自分の怒りをヒートアップさせるタイプだ。

「な、奈江、言いすぎだよ、ほら一回座って……」
「お姉ちゃんも何呑気に構えてるのよ！　あんなこと言われて悔しくないの！？　ケンカ売ってきたんだよ、売られたら買うもんでしょ、徹底抗戦でしょ！」
「……あ、えっと」

気圧されてしまった。どうやら火に油を注ぐ結果となってしまったらしい。どうすればいいのか判らないので、助けを求めるようになぜか文月の顔を見た私は、

「――」

笑みを浮かべる彼女の顔に、はっとした。

「いい妹さんをお持ちのようね」
「私は従妹だ！！」
「いい従妹をお持ちのようね」
「二度も言わんでいい！　んなこと判ってる！」

…どうやら、文月の言うことはなんでも否定したいらしい。
文月は楽しそうに奈江を見て立ち上がり、「帰るわ」と言った。

「おーよ、帰れ、今すぐ帰れ！」

リビングを出て行く文月に噛み付かんばかりの勢いで騒ぎ立てる奈江。
文月は去り際に、

「――あなたにもう少し彼女みたいなところがあれば、可愛げがあるのに」

「……え？」

彼女は去る。奈江は「塩まいてくる、塩！」と息巻いて本当に塩を持って玄関へ行ってしまう。

残された私は、文月の残した言葉を理解できないでいた。

「…どういうこと？」

緋水杏子は、閉ざされたドアへかける最後の鍵を手に入れる。

「Frozen　Memory」

一人だった。

お父さんもお母さんもいつも仕事で家にいないから。
だから鍵を持ってるの。

友達にいつもそう言っていた。私の中では親が仕事で忙しいのは普通のことだったとしても、友達にとっては普通のことではなかったらしく、驚かれたり、「そうなんだ」と哀れみの眼を向けられたり同情されたりした。
いつしか「他の人と違うワタシ」のことを格好良く感じるようになった。
親に甘えてる人たちなんかよりも、私は優れている。私は親の迷惑になんかならないんだ。
幼稚園が終わって、母親が迎えに来てくれる友人のことなんか羨ましくなかった。
夕方家に帰ってきて、両親が帰ってくるまで一人で過ごすのも寂しくなかった。
嘘じゃない。本当だもん。
私は他の子と違うんだから。

そんな幼い頃の緋水杏子を、私は離れたところから無表情で見つめていた。
ここはどこだ。

ここは、夢か？
映画でも見ているかのように、私の幼き頃の思いが目の前に映し出されては消えていく。泡のような小さな思い。干渉することは許されない。私が触れようとすれば泡は弾けて消えてしまうのだから。
……にしても、回避も出来ずに一つ一つが胸を締め付けるのは如何ともし難い。
一方的ですか、そうですか。
「……」
ある一つの泡が私の目の前に現れた。冷たい、氷のような泡だ。
私の周りが真っ暗になる。
私はその思いに吸い込まれていく。

ある冬の帰りだった。
雪が降っていた。幼稚園のバスの帰りから降りた私は、いつものようにバッグから鍵を出してドアを開けようとした。
バッグの中に手を入れて、ごそごそとまさぐる。
「…あれ？」
おかしいな、いつもあるはずの鍵が、ない。
心臓の鼓動が早鐘を打つ。バッグを地面に置いて、中身を一つ一つ取り出す。ハンカチ、ティッシュ、お弁当箱、キャラクターの絵付の小さい筆箱。

それで全部。

何度も何度も探す。もうすでに判っているのに、見つからないなんてことは判っている筈なのに、バッグにない鍵を探し続ける。
いつしか探す手の動きが鈍くなっていていき、私は途方にくれた。
「…どうしよう」
家を出たとき確認したっけ？　してないような気がする。
それか、幼稚園にいるときに誰かが持ってっちゃったのかな…。

――ともかく、今の大きな問題としては家に入れないことだ。
ドアを見る。いつもとなんら変わりないドアなのに、今日は私の日常を妨げる怪物のように見えた。
雪が深々と降り積もる。私はドアを背にして、体育座りをした。
大丈夫。
いつものように待ってれば、お母さんが帰ってくる。
いつもとほんの少し、待ってる場所が違うだけじゃないか。
かじかんだ手に息を吹きかけ、こすり合わせてあっためてから、黄色い帽子を深くかぶってお母さんを待つ。
だけど、今日に限って時間が長く感じる。夕方になっても、日が落ちても、お母さんは帰ってこない。
「……おかしいなぁ」
そう呟くと、なぜか笑みがこぼれた。待ってる間も行きは深々と降り積もり、目の前は一面の銀世界だ。今日は誰も外に出たがらないらしく、道を行く人も少ない。
指が冷たくてしょうがないので、顔に指を当てる。驚くほど顔の熱は熱く、指先は冷たかった。
……雪遊びしたいけど、今は、そんな気分じゃないや。
震える体でそう思う。
外が闇に包まれるにつれて、周りの家の明かりが灯っていくにつれて、不安がどんどん大きくなっていく。マッチ売りの少女の気分だ。でも私には夢を見させてくれるようなマッチは持っていない。
「おなかすいたなぁ……」
故に、夢さえ見れないのだ。
どうしてだろう、目頭が熱くなってきた。どうしよう。どうしよう。
溢れ出て、頬に伝う涙を止められない。私は顔を膝小僧に押し付ける。
私は、両親に迷惑はかけられないのに。
「寂しいよぉ……。お母さん…」

だめだ。ちょっと今日は、耐えられそうに、ない。
「……杏子！？　杏子、そんなところで何してるの！？」
――あ、お母さんの声だ。
でもなんでだろ、体が動かないや。まるで私の体じゃないみたいだ。
少しずつ、体が横に倒れていく。お母さんの声が遠くなっていく。
おかしいな。

こんなに溢れる涙は止まらないのに。

「……思い出した」
まだ少し、寒気がする。
周囲は闇に閉ざされ、私は電気をつけることもせずに起こした体を再びベッドに沈めた。
停学六日目、夜。
文月が帰った後、怒る奈江をなだめすかせて帰らせた私は、ふらつく頭を休めるために少し昼寝をすることにしたのだ。
昼寝、というには、少し遅くまで寝すぎたようだが。
「妄想、じゃないよね…、今の夢」
夢にしては感覚が妙にリアルだった。
それ以上に私自身の体が、あの夢は私の記憶であると告げている。
あんなことがあったのか。
どうも前後関係がはっきりしない。幼稚園くらいの頃の記憶だということは保証できるが、年少、年中、年長、いずれの時期かは判らない。
両親に聞いたら、すっきりするんじゃないのか。
だがこの考えは、私の頭が「聞くんじゃない」と警告を鳴らすせいで行動に移すことはなさそうだった。なぜかは判らないのだが。

「杏子？」
ドアがノックされた。
「はい？」
「ちょっといい？」
母が、少しドアを開けた。私は体をもう一度起こす。両親のほうから私に接触してくるのは停学になってから初めてのことだった。
「話が、あるんだけど」
まだ私と接することに戸惑いがあるのか、歯切れの悪い調子で母は言った。
「なに？」
「リビングでしたいから、下に降りてきてくれないかしら？」
「判った」
大事な話でもあるのだろうか。
大きくかぶりを振る。
馬鹿か私は。判っているじゃないか。ある意味さっきの夢は予知夢みたいなものじゃないか。どうしてそう逃げようとするんだ。両親から教えてくれるというのだから、教えてもらおうじゃないか。
さあ、真実を知りに下へ降りよう。

「むかし、いま」

今まで言ったことともないし、これから言うつもりもないが、杏子は当初、共働きの両親にとって喜ばしい子供ではなかった。

が、一般的に聞くよりも、杏子は驚くほど手間のかからない子供だった。

今になって思い返してみれば、仕事の忙しい自分たちに迷惑をかけまいと幼心に気を使っていたのかもしれないが、真意を問う勇気は父にはなかった。どちらにしろ、杏子に辛い思いをさせていたことに変わりはないのだから。

両親はどちらも安心して自分の仕事に打ち込めた。

もちろん、時間があるときはできるだけ接するようにつとめていた。幼稚園でどんなことがあったのかを聞いてみたり、一緒にお風呂に入ったり、ほんの数回だけでもアミューズメントパークに連れて行ってあげたりした。

子供の育て方を誤っていたつもりは、これっぽっちもなかったのだ。

その日は、今年一番の冷え込みが予想されると天気予報で言っていた。

その日は、緋水杏子の人生の一つの分岐点だった。

母は、病院のベッドに横たわる杏子の側に座っていた。

仕事に行く気など全くない様子で、ろくに食事もせずに杏子の側にいる。

あの日から、今日で三日目。

杏子は、目覚める気配がない。

この病室で動くものといえば、彼女の腕から伸びている点滴の雫だけだった。
ブラインド越しに差し込む日差しと白い病室は、さながら神聖なものを感じさせる。
時折うわ言の様に「ごめんなさい、ごめんなさい……」と呟く幼児は、不気味な部分をも感じさせる。
それ以外は、静寂。
静かならまだいい方だ。つい数時間前まで、母もまたひどい状態だった。自分のせいだと泣きじゃくり、物を投げ、手もつけられないほど錯乱気味だったのを、看護婦と父で何とか落ち着かせてここまで静かにさせたのだ。
杏子の側にいることで、心の平穏を保とうとしているらしい。
立ち直れるだろうか。
同じ階のロビーでタバコをふかしながら父は思う。幸い大事には至らないものの、今回のことで自分たちの杏子に対する接し方は明らかに間違っていたことを痛感していた。
安心していたのだと思う。自分の娘は他の娘より出来ていたと思っていたから。
それを傲慢だと知らずに。

杏子は、自ら望んでしっかり者になったわけでは、決してないというのに。

熱が下がったのは翌日の夕方のことだ。
母は自分で看病したいと申し出たのを、医者ももう悪くなることはないだろう、と許可を出したので、いまだ目覚めることのない杏子をおんぶしてつれて帰ることになった。……ある意味、これも傲慢であると思うが、母のの気持ちを考えると、父は何も口には出さ

なかった。
雪は降り止んでいた。
もともと雪が降るのも珍しい地方だ、今回のことは偶然に偶然に重なった悪い出来事としか思えない。
杏子に十分暖かい格好をさせて、父と母、そして杏子の三人で冬の夜を歩いて帰る。
「……これからどうするかね？」
ただ黙って歩くのもどうかと思うので、母に声をかけてみる。しかし、母はうつむいたままで反応しない。無視しているのではなくて、もしかしたら声が届いていないのかもしれない。
「……？　お母さん…」
河川敷を歩いていたときだった。杏子がようやく目を覚まし、眠け眼をさすりながら母の肩から顔を上げて辺りを見回す。
「杏子！？　良かった……」
母もようやく、感情らしい感情を見せた。安心からか、無意識のうちに涙が頬を伝った。しかし娘を一刻も早く家に帰らせたいから、歩みを止めることはない。父もほっとして、母と娘の両方の頭を交互に撫でてやった。
「…お母さん？　どうして泣いてるの？」
「なんでもない、なんでもないのよ…」
体を震わせ、嗚咽を漏らしながらも歩く母に、杏子はまた幼児らしくない顔を見せた。
「もしかして私、お母さんに迷惑かけちゃった……？」
母は首を小さく横に振る。
そんなことはない、と。悪いのは自分たちだ、と。
なのに。
「…ごめんね、お母さん、お父さん。私、もっとしっかりするから…」

自分の娘は、どうしてこんなに良く出来た子になったんだろう。
杏子はそれだけ言うと、また深い眠りについてしまった。

「――次に君が目を覚ましたときには、君はもう、あの日のことは何も覚えていないようだった」
ずっと話し続けるのは喉が渇くのか、父は番茶をずず、とすすり、申し訳なさそうな顔で私を見た。
「――うん。話を聞くまで思い出さなかったよ」
本当はついさっき夢で大体思い出したのだが、忘れていたことは事実なので父に同意した。だろうね、と父は頷く。その隣では母がずっと目を伏せている。こんな母を見たのは初めてだった。……初めてのはずなのに、初めてではない感覚。幼い私が、錯乱気味の母の状態を記憶のどこかにとどめているからなのだろうか。
「どうしてだろうね、私たちはそれだけで、君に何も言えなくなってしまったよ」
「……」
「そして君は、前以上に神経質に、完璧な人間を求めるようになっていった……」
『親の笑顔を見たい』という私の思い。それは裏を返せば、『親の悲しい顔を見たくない』という思いだったのか。私が封印してまでしようとした記憶は、私をそんな強迫観念に包み込んでいた。
「そっか。そんなことがあったんだ」
「だからね杏子。君がしっかりものになるのは、私たちは見てて誇りだった。でもね、同時に責められてるような思いだったよ」
私が完璧でいればいるほど、そのように振る舞わせなければならないきっかけとなるあの日の出来事の影を見ないわけにはいかなかったのだろう。なんだか申し訳なかった。
「それでね杏子。私たちは今回のことで、もう君に無理はさせられないって感じたんだよ」

自分と、他人の感じ方は違う。
私は、自分の今の生活を自分なりに普通であると受け止めているが、ある人からは無理していると言われ、ある人からは気持ち悪いと言われる。
「……あの日の話を今までしなかったのは、君に嫌われたり、恨まれたりするのが怖かったからかもしれない。けどね、言わなければ、なにも解決しないからね」
父は立ち上がり、私に向かって頭を下げた。

「どうか、許して欲しい」

なんでだろう。
なぜか、体全体が軽くなったような気がした。
肩の荷が下りたような感覚だった。
「――大丈夫だよ、もう過ぎちゃったことなんだし。忘れてたことを思い出しただけで十分。……それにさ」
私は、これから言うことを本心だと判ってもらうために、父と母を真っ直ぐに見た。
「今、お父さんもお母さんも、私をどれだけ愛しているか知ってるから。だから、もう大丈夫」
二人とも、憑き物が落ちたかのような表情で私を見ていた。
――ああ。
私は今、ようやく自分らしく生きることを取り戻したのかもしれない。
挫折、いつもと違う日常、経験、知らない人との出会い。
一度は立ち止まらなければ判らなかったこと。
ようやく気づけたのだ。私がどれほど幼稚だったってことを。
「……これからさ、また迷惑をかけることがあるかもしれない」
私は笑顔で、両親を見た。

「でもそのときは、またよろしくね」

両親も、私に笑顔を見せる。

壊れた世界は、新しいカタチに、少しずつ修復していく。

「変わるのではなくて」

停学七日目はあっという間に過ぎていき、ついに私は学生生活の舞台に再び舞い戻ることとなった。

君の自由に生きなさい。

父の言葉は、新たな道を私に指し示してくれた。

朝の目覚めはかつてないほどに良いし、朝食もおいしかった。部屋に差し込む朝の光が眩しくて、暖かい。

お気に入りのリボンで首のところで髪をしばり、忘れ物がないか確認してから家を出る。

忘れ物はなかったけれど、心に留めておかなければならないことが一つ。

どっかの本に書いてあった。

人間は、自由という名の鎖につながれている、と。

教室に入り、鞄をおいて辺りを見回す。みんな私と目を合わせようとしない。

当たり前だ、突発的なこととはいえ文月の顔面を臆面もせず殴った私とお近づきになろうとするなんてよほどの変人だ。

元々人と群れることもないのでいつもと変わらない生活。宿題を写しに来る人が少し減るだけ。

そんな生活に、戻るはずだったのに。

「あの……」

どうやら今回の出来事は、そう単純に終わってはくれないらしい。

教室内の朝の喧噪をくぐり抜け、私に話しかけてくる人がいた。

何の用かは知らないがとりあえず、

「おはようございます」
「お、おはようございますっ！」
ぺこり、と。彼女は条件反射的に私に頭を下げた。
ショートカットが活発そうな印象を見せるが、そうでもないらしい。目立たない子なのか、すぐに名前を思い出すことが出来なかった。同じクラスだというのは判るのだが。
「あの……、私、謝らなくてはいけなくて」
「え？」
「緋水さんのいじめに参加してしまって……」
「あ、なるほど」
両手を合わせて理解する。私に謝らなければ、彼女の良心の呵責に耐えきれなかったわけだ。
「……」
我ながら穿った見方だと思う。彼女はただ純粋に悪いと思って謝りに来ているのかもしれないのに。
「いいわ、もう終わったことだし、気にしないで。えーと……椋さん？」
はい、と木下椋は小さく頷いた。よかった、四割くらいは当てずっぽだったから心配した。
すると堰を切ったかのようにクラスにいた人が一斉に私の周りに集まってきた。
「……へ？」
「ごめんなさい緋水さん！」「本当は私たち、やるつもりはなかったんだよ」「まさか高校はいってまでいじめやるなんて思ってなくて……」
「あの……殴らないでね？」
なんだなんだ。
私は呆気に取られて人の山を見つめ返す。ああ、図らずも毒味役となった椋が山に飲み込まれ押しつぶされていく。
どう対応したらよいか判らなかったので、苦笑だけしてみた。

「えーと……大丈夫ですから。本当に、もう気にしてません。……本当に」
人々の視線に鬼気迫るものを感じたので、念押しに強く私に攻撃する意志がないことを伝える。
安心した人々の、それはそれはうれしそうな顔。
その中でも、椋の嬉しそうな顔が印象的だった。

昼休み。
今日は結城も文月も学校へは来ていないらしい。否、少し訂正。結城は学校へは来ているが授業に出ていないらしい。彼の机にバッグがかかっているが姿を見ていないから。
鞄の中からお弁当を取り出し、中庭やら学食やらで大半の生徒が消え換算とした教室で手を合わせる。
「緋水さん」
椋だった。手にはお弁当箱が入っているのか、青いバッグを持っている。
「ご一緒していいですか？」
「いいですよ」
彼女は人懐っこく笑みを浮かべて私の隣の席に座った。
「今朝はすごかったですよね。改めて緋水さんのすごさが判りましたよ」
「そう？　ただ危険物扱いされてるようにしか思えなかったですけど」
椋は苦笑しながら、「まぁ、そうかもしれないですね」と言ってお弁当箱の蓋を開ける。私も彼女に続けてお弁当箱の蓋を開けた。
「いただきます」
「ちょっと待った」

私と椋は、二人して顔を上げた。
そこには、たった今登校してきたばかりなのか、荷物を持ったまんまで陰満文月が立っていた。
「…何か用ですか？」
箸箱から箸を取り出し、ご飯に手をかけようとする。
「だから、ちょっと待ったって言ってるのよ」
私はずいぶんと訝しげな視線を文月に向ける。隣では椋があっけにとられた様子で私たちを見つめている。さぞかし不思議な光景に見えるだろう。一週間前まではクラスの両極端にいた存在なのだから。今も同じようなものだが。
「…あの、お弁当、食べたいんですけど」
「私に付き合いなさい」
「私そういう趣味はないんですけど」
「違うわよ！　私だってそんな趣味ないわ！　昼食よ、昼食に付き合いなさい」
クラスのどっかから「え？」という声が聞こえた。私も小さく驚きの声を漏らした。この人は何なんだ。何を好き好んで大嫌いとけなした人と昼食を食べるのだろう。私ならお断りだ。
だが、彼女のサドっ気たっぷりな雰囲気は、有無を言わせないものが合った。
「ですけど、私、椋さんと一緒に食べるんですけど」
隣を向いて、「ねえ？」と相槌を求めようとしたが、彼女はどうすればいいのか困っているらしく私と文月の顔を交互に見ながらどう対応するべきか決めかねていた。
馬鹿者、こういうときは嘘でもうんと言ってくれれば正当性が出るのに。
出るのに。
「木下さん、ちょっとこのお嬢様借りてくけど、いいかしら？」
「え、えーっと…」
椋は私の顔をちらり、と見た。私の判断に従いたいらしい。

全く、長いものに巻かれるばかりの人生は良くないと思うのだが。
「判ったわ。付き合えばいいんでしょ、付き合えば」
私は観念したように肩をすくめ、
「じゃ、どっかから机を持ってきて……」
「あのね、私はここで食べたくないの。どこか別の場所へ行きたいんだけど」
イライラしながら文月が答える。
「まあ多少は判っていましたけど」
「…あなた、性格悪くなってない？」
「気のせいです」
お互い様だ。第三者から見たら火花でも散ってるかもしれない。
椋が火傷しそうなくらいに。
「で、どこへ行きたいんですか？」
お弁当の蓋を閉めて立ち上がる。不本意だが、付き合っておかないと後々怖い。
文月は人差し指をぴっ、と立てた。
「公園」

「気づくこと。大事なこと」

午後の授業に出られないのは覚悟しておこう。
学校から数分歩いたところにある公園は、中央にある大樹が印象的な、この町一番の広さを持つ児童公園だ。
そして、かつて結城と出会った公園である。
あれからまだ数日しかたっていないというのに、ひどく前の出来事に思えた。
「……」
足が勝手にかつて座っていたベンチの側まで動き、私は大樹を見上げる。
結城はいない。
学校にもいなかったし、もしかしたらいるかもしれない、と淡い期待を持っていたのだが。
「どうしたの？　ぽけっと樹なんか見上げちゃって」
「……いえ」
胸をかすめる虚しさがやけに染みる。
文月はそんな私を横目で見ながらベンチに座り、コンビニで買ってきたのかおにぎりと紙パックのレモンティーを取り出して、おにぎりのパックをぴりぴりと破り始めた。しばらくしてから私も彼女の隣に座り、膝にお弁当を広げ、手始めに玉子焼きをつまんだ。
――正直のところ、自由に生きなさい、と言われてほっとした反面、疑問に思う部分があった。
自由とは、なんだろう、と。
今までの自分の生き方でも不自由なことはなかったわけだし、急に自由に生きなさい、といわれても困るといえば困る。
やはり私の親はどっか抜けてるんだなぁ。
「――」
箸を止める手を一瞬止める。

なんか、愉快。
私は今まで両親のことを悪く思うことなんて、なかったというのに。
これが自由になったってことなのかな。
「……ちょっと、何一人でニヤニヤ笑ってるのよ、気持ち悪い」
文月があからさまに怪訝な視線を私に向けていた。まずいまずい、そこまで口元を緩ませてしまっていたか。頬を二、三回叩いて表情を元に戻す。
「すいません、一人悦に入っていたみたいです」
「……全く、なかなかどうして」
「はい？」
「数日でそんな顔つきが変わる人、初めて見た」
「……私、そんな変な顔してました？」
慌ててもう一度表情が崩れていないか確認する。
「だから違うっての。ニブいわね」
彼女は私を指して「意外に洞察力がある人」と言っていたが、彼女はそれ以上なのではないだろうか。
——判る人には、判るものなのかな。
文月はおにぎりを咀嚼しつつ呆れたように私を見る。思いっきりぶん殴ってから気づくのもあれだが、彼女は、すごく美人だ。目は切れ長だし、鼻は高いし。白いし。顔のパーツのおかげか、それほど努力しなくても男子の目を惹きそうだ。努力型の私にとっては羨ましい限りだ。
——あ。そうだった。
「……ごめんなさい」
頭を下げる。
「は？　なによいきなり」
「殴ったこと、この前謝りそびれちゃったから。結構本気で殴っちゃったし、痛くありませんでしたか？」
「痛かったわよ。最初何されたか全然判らなかったし」

「私、感情が高まると突飛なことをしてしまうタイプらしくて」
「……人間の大半はそうだと思うけど」
「それで、何で私と一緒に昼食を食べようと？」
「よく話が変わるわね……」
呆れたように文月は残りのおにぎりを頬張る。なんか、顔に似合わず豪快な食べ方だ。
「……翔太に、確かめてこいって言われたから」
彼女は紙パックのレモンティーにストローをさす。
「翔太？」
翔太って、確か結城の下の名前ではなかったか？
「そう、同じクラスの。この前話したらしいから知ってると思うけど」

胸の奥がざわめいた。
初めての感覚だった。

急激に、頭の中が一つの言葉で埋め尽くされていく。
彼と彼女は、いったいどういう関係なんだろう。
聞かずに入られなかった。
「結城くんとは、お友達なんですか？」
「え、そうね、腐れ縁ってか、幼馴染なのよ。家が近いし、親も仲良いから良く話すの」
「へー……」
お弁当と口を行き来する箸の動きをオートモードにして、頭に浮かんでは消える文月と結城が楽しく話している、妄想としか言いようのない姿を消滅させようと奮闘したが、なかなか上手くいきそうになかった。
文月はレモンティーを飲みながら私のほうを見ていたみたいだが、やがて意味ありげな笑みを浮かべ、
「大丈夫よ。私は男と女の間に友情は成立するって考えてるから」

オートモード終了。
「時々いるのよ。男と女の間には恋愛感情しか生まれないって考えてるガキが。あなたはどう考えてるのか、なんて意見は聞くつもりないけどね。陳腐だし」
よく判らなかった。
文月は何を言わんとしているのだろう。
「でもね、長年付き合ってきた視点から言わせてもらうと、あいつはかなりひねくれてるから扱いは難しいわよ」
「…どういうこと？」
言ってる意味がよく判らない……ん？　なんだろう？　私はまた本当は気づいているのに事実から逃げようとしているのか？
理性では、判っているのだ。
私は、結城のことが
「好きなんでしょ？　翔太のこと」
耳まで赤くなったような気がする。
「いや、いや、いやいやいやいや！！　そ、そんなことは決して！」
ダメだ、認めるわけにはいかない。
認めたら私は負けな気がする。何の負け か判らないけど。
「ウブねー杏子お嬢様。普段の落ち着きが欠片もないわよ」
「そ、そんなこと言ってからかわないでください！」
ツバが飛びかねない勢いで文月に噛み付いた。やばい、理性が機能低下して上手く働いてくれない。
文月はおかしそうに笑いながら紙パックをつぶし、「やっぱり面白いわ、あなた」と呟いた。
「ギャップがね。一昨日も、あなたと従妹さんのギャップが面白かったし、あなた自身にも二面性があるのはとても面白いわ。ギャップを保つために普段お嬢様を気取るのも悪くないかもね」
なんか、毒気を抜かれてしまった。
「他の人はどうか知らないけど。私、ギャップに弱いタイプだから。私の彼氏も普段なよなよしてるくせにいざという時芯が強いみたい

でね」
「――へ？」
彼氏？
「か、彼氏いるんですか！？」
「いちゃ悪い？」
「そ、そういうわけじゃないんですけど……」
オ、オトナだ。
彼女からしてみれば私を馬鹿にするのも頷ける……じゃなくて。
「だから、安心して。翔太とはただの友達だから。あなたがその気なら、応援してあげるわよ？」
「いりませんよっ」
つん、と顔を背ける。これ以上からかわれるのはごめんだった。
――同時に生じた、奇妙な違和感。
食べ終わったお弁当箱に蓋をする。正直何を食べたかすら覚えていない。ごめんなさいお母さん。
「あの」
「ん？」
「嫌いじゃないんですか、私のこと」
「ええ、大っ嫌いよ」
「……嘘じゃ、ないですよね？」
家に押しかけてきたときとは違う、距離が近くて、温かみのある声で文月は返答する。
「どうしてそう思うの？」
質問に質問で答えるのは無礼な行為なんだぞ。
「いやまぁ、なんとなくなんですけど」
それでも答えてしまう私、ああ、なんて真面目。
「お嬢様が野生の勘に頼っても良いことないわよ」
文月はビニール袋の紐を縛り、立ち上がる。
「遅刻の手続きとかしなきゃならないから、先に行ってるわね。あなたも急いだほうが良いわよ」

携帯を見る。五時限目が始まるまで十五分程度。間に合うか間に合わないかぎりぎりのラインだ。
「無理につき合わせて、悪かったわね」
初めて聞く謝罪の言葉は、私の耳にやっと聞こえるくらいで、すぐに風に流れて消えていってしまった。
「――いえ。そんなことないです」
文月が謝罪の言葉を口にするとは思わなかった。彼女はそのまま、振り返りもせずに「じゃ」と言って公園から立ち去ってしまう、その背中を見送った私はうーん、と伸びをして立ち上がる。
「――悪い人じゃ、ない気がする」
「や、もしかしたら油断させておいて後ろからぐさり、なんて奴かもしれないぞ」
大樹の裏から返答があった。
私は首だけ動かして大樹を見る。目を凝らして透視しようと試みなくても、声で誰かすぐに判った。
これくらいで動じないとは、成長したもんだ。慣れって恐ろしい。
「あなたが文月さんのことをそういう人だと言うんだったら、きっとそうなのでしょうね」
「そうだな、俺が言えるのは、あいつは後ろじゃなくて前から刺すタイプだって事だ」
おかしそうに笑う声が、大樹の陰に響く。全く、趣味の悪い。
私はベンチに座りなおす。最初から諦めていた五時間目だ、今更急いだところでしょうがないだろう。
こんなに広い公園だと言うのに、お昼と言う時間帯では人影もほとんどない。白い鳩たちが、人間の代わりに公園の支配者になっていた。お菓子とか持っていたらよかったなぁ、と残念に思う。
「いつからいたの？」
「緋水たちが来てからずっと」
――つまり、先ほどの恥ずかしい会話は本人に全て筒抜けだったわけで。

うう、意地でもさっきの話を蒸し返さないようにしなければ。
「あのさ、ちょっとした仮説、聞いてもらっていい？」
「聞くだけならな」
彼は、大樹の陰から姿を見せようとしない。なんか話し辛いのだが、私の方から行く気にもならなかった。
「文月さんって、本当に私のいじめの首謀者だったんですか？」
「本人が肯定してるなら、そうなんじゃないのか？」
「でも、とてもそんな風には見えないんですよね」
陰満文月は、クールで理知的で、言いたいことははっきり言うし、人をおちょくる茶目っ気もあるみたいだし、そして何より、行動派だ。
先ほど彼が言ったように、「やるんだったら後ろからじゃなくて、前から」なのだ。
どうしても、私が受けたいじめの陰湿さと、かみ合わなかった。
「受けた本人が言うんだから間違いないです。文月さんだったら、体育館裏に呼び出してタイマン張りそうだとは思いませんか？」
「違いねぇ」
二人して笑う。安易に想像できてしまう所がさらに笑いを誘った。
「……その調子だと、吹っ切れたみたいだな」
「え？」
「この前あったときはウジ虫みたいに悩んでたみたいだけどよ、今は元気そうだしな」
「――心配してくれてたんですか？」
「別に。俺は自己中心的な奴だからな、人の心配なんてしないんだ」
眉を寄せて大樹のほうを振り返る。なんで私の周りはやさしい嘘をつく人がいないのか。
「ま、よかったじゃねぇか。俺はどっちかと言うとお嬢様じゃない緋水のほうが好きだから」
「そ、そう？」
なに顔赤くしてるんだ、馬鹿か私。結城は恋愛対象じゃなくて、

人間として私のことを好きといってくれているんだから、落ち着け私。
無理だった。
「なんかそう言われると嬉しいな」
すぐそこにいる想い人のために、一生懸命言葉を紡ぐ。
「結城くんのおかげだよ。結城君と会ってなかったら、きっと私、まだ立ち直ってなかった」
たとえ偶然だったとしても。気まぐれであって、一目惚れであっても。

「ありがとう」

「礼を言われるほどのことでもないが、悪くないな、礼を言われるのも」
まんざらでもなさそうな結城の声。
――今はこれだけ距離があるけれど、いつか手を繋げるくらい近づけたらいいな、と思う。
空を見上げて、目を閉じた。やわらかく吹く風が気持ちいい。まぶたを貫いて届く日の光が、暖かくて、安心する。
もう大丈夫。
まだすべてが万事解決したわけじゃないけれど、きっと私はもう平気だ。
強がりじゃない。本当だもん。
もう私は、幼い頃の私じゃないから。
これから自分自身の物語はずっと続いていく。
いろんな人との繋がりを大事にしながら。
文月さんとも仲良くなれると思うし、
結城くんとも、もっと話せたらいいなと思う。

この世界は、さまざまな色に満ち溢れている。

私は変わったわけじゃなくて、世界の見方に、気づいただけ。

だから、これからの物語で、何が起こるか楽しみだ。

今度は、私以外の誰かに大変なことが起こるかもしれないけれど、

そのときは、助けよう。

結城くんが、私を色のない世界から、救ってくれたように。

「気づくこと。大事なこと」（後書き）

リトル・ガーデン第一部、「杏子の場合」これにて終了です。
第二部は「文月の場合」。別視点からのお話になります。
杏子視点では解き明かされなかった、結城と文月との関係、文月の彼氏、本当のいじめの首謀者とは…などなど、伏線の回収に参ります。
ここまで読んでくださってありがとうございました。
よろしかったら、「杏子の場合」までの感想をいただけたら文月の物語を書くときに励みになります。

<夕暮れの開幕>

今でこそ陰満文月はクールで、緋水杏子とは別の意味でお嬢様と呼ばれてもなんら遜色はないのだが、当時は病弱で内気で、ピンクの下地に白水玉模様がついたパジャマの似合う少女だった。

昔のことに興味はない、と彼女は幼少時代を頑なに自分から話すことを避けるが、興味はないのではなくて恥ずかしいのが本音に違いない。

実際、文月の代わりに周囲にいる人が彼女のことを話すときは実力行使をしてでも止める。　しかし奴らの口は驚くほど軽く、呆れるほどペラペラ喋るせいで、いつの間にか広がっているのにはさすがに頭を抱えたくなる。

男だったら幼馴染の結城翔太が。

女だったら小学校以来の親友の木下椋が。

そして話を聞かされた奴らから、『信じられない』という顔で見られるのだ。

お決まりのパターンだった。

小学校のクラス替えの度に、中学校のクラス替えの度にあったものだが、ついに高校に入ってからその習慣はなくなった。　翔太は受験の際、親といざこざがあったらしく受験前とは随分性格が変わってしまったし、椋は見知らぬ人に積極的に話しかけられるほど活気のある人間ではなかったからである。

小学校、中学校はまだ学区内が小さいから良かったのだ。
こんな中高一貫の学園に、入学という形で編入されてきても、疎外感を感じるのも無理はない。

だがかくして、文月は高校生になってようやくパジャマの似合う少女、という過去のイメージを払拭し、外見のイメージ通りの『お嬢様』、ならぬ『女王様』となった。

なんの運命の巡り合わせか知らないが、翔太や椋と同じクラスになってしまったのはしょうはないとして、一番気にかかったのはクラスメートから普通に「お嬢様」と呼ばれている緋水杏子の存在だった。
彼女はいつも、文月の席から右に二つ、後ろに二つ離れた席で時には一人で静かに本を読み、時には周りを人に囲まれて談笑していた。

普通の女性、に見えた。

ただ、普通ではない。
非の打ち所がないのだ。物腰にしても、学力、運動の出来具合にしても。

文月には、それが薄気味悪く感じた。

人間というのは、多かれ少なかれ、必ずどこかに欠点があるものなのだ。翔太はああ見えて実は球技が致命的に下手だし、椋は大人しそうに見えて結構嫉妬深い。自分自身にしても、二人に「悪魔の歌声」「破壊音」などと罵られるほど音痴で、カラオケ恐怖症なの

だ。
聞くところによると、緋水杏子は絶対音感まで持ち合わせていて、一度聴いた曲をピアノで再現できるまでの腕の持ち主だとか何とか。
なんか、悔しい。
非の打ち所のない人間なんて、いないはずなのに。
気味が悪かった。
悪かったけれど、あまりにも自分の反応がマイノリティなものらしかったので、「ああ、そういう人もいるのだなぁ」と割り切るしかなかった。
学区が広いだけあって、高校にはいろんな人がいるもんだ。
高校生活が始まって、二回目の金曜日のことである。

「付き合ってください！」

突然目の前に立たれて、あろうことか周りが思わず反応するほど大きな声で告白された。
さらに隣には椋がいて、場所が桜緑学園高等部の正門で、時刻的に下校する生徒もピークだった。
その全員の目が、自分と、目の前にいる奴に集中していた。
手で目頭を押さえて天を仰ぐ。嫌な予感はしていたのだ。朝の占いで自分の運勢が今日最悪であることを知ったときから。嫌いな教

師に何回も指されるわ、宿題は忘れるわ、学食のあんぱんは売り切れてるわ、掃除当番じゃないのに掃除を手伝わされるわ。

で、最後がこれか。

文月は「見せもんじゃないわよ」と周囲を目つきのみで威嚇する。足を止め、興味津々に見ていた生徒はそれだけで恐れおののいて小走りで去っていく。こういう出来事の一つ一つが彼女の「女王様」率を高めていくのだが、まるで本人は気づいていないのである。

ひとしきり周りを睨みつけたあと、文月はそのまま機嫌の悪い女王様の目で目の間の奴を頭のてっぺんからつま先まで値踏みする。

身長が自分より低い（－５点）、童顔（－８点）、気が弱そう（－７点）、空気呼んだ場所で告白しない（－１０点）。

前向きに考えてこんな場所で告白する勇気を認めた（＋５点）としても、１００点からの減点方式で７５点。

７５点。

最悪だ。

最悪、とは言い過ぎかもしれないが、今まで告白してきた男子の中ではワースト５に入るくらいのひどさだ。

文月は女性で、高一にしては身長が高いと言われがちで、自分もそれを自覚しているのでそこまで身長にはこだわっていないのが、それにしても低すぎだった。

だって、身長が自分の胸のところまでしかないなんて。

普通は逆だろうに。

だから、結果として、こう言おうとした。

『――私、豆みたいな男に興味ないの』

経験上、短時間で終わらせるには断りの一言が重要だ。大抵の男はこれで諦めてくれるし、ぐだぐだと後に引きずることもない。それでも諦めない女々しい男は男としての価値はないし、容赦もしない。幸いにして、ド変態に会ったことはないからこの方式で通している。

だから、この言葉を突きつけようとした。

「私――」

一応礼儀として、彼の顔を見る。

同じ高校生とは思えない顔にある瞳には、迷いや恐れはない。

良くも悪くも、純真だった。

――ふいに、幼い自分の影が重なる。恋愛においての挫折を知らない、真っ白だった頃の自分が。

間違いない。

彼は、目の前にいる自分へ、真剣に恋をしている。

初恋なのだ。

出そうと思っていた言葉が、出ない。

心が揺らぐ。

「……悪いわね」

彼をすり抜け、逃げるように校門を出ようとする。

「あなたとは、付き合えないの。ごめんなさい」

判る。背中越しにも、彼が自分をじっと見つめているのが。

その視線が、なぜか痛かった。

あとのことは椋に任せておけば問題ない。食事のおごり一回分と引き換えに自分が振った男をなだめるのが彼女の役割だから。

夕日がまぶしい。刑事ドラマの世界みたいだ。なんら悪いことをしていないのに、取調べを受け終わった人の気分。

間違ったことはしていないはずなのに、いつもと同じ行動をしたはずなのに、文月は罪悪感を募らせ、家路を歩き続ける。

＜眩き休息＞

陰満文月は彼のことを、武笠悟志のことをわかっちゃいない。てんで判っちゃいない。

悟志はナリは小さくても、文月のことを想う気持ちは人一倍なのだ。

あんな断り方では、諦めるはずないのだ。

いつものように、相手を二度と立ち上がれないようにするくらいの強烈な一撃を見舞っておくべきだったのだ。

だというのに。

変な情けをかけるをかけるから悪いのだ。

文月は知るまい。悟志が実は同じ中学出身だと言うことも、その想いが三年越しのものだということも、来るべき告白の日のためにさまざまな準備をしてきたことも。

その中に、情報収集も含まれることも。

曰く、外見と同じく氷のような性格をしているだとか。

曰く、古風な考え方の持ち主であるとか。

曰く、どんな相手に告白されても、ただの一言でばっさりと切り捨てるとか。

悟志は、良くも悪くも純真である。

その意味では、文月の人を見る目は間違っちゃいない。むしろい

いほうである。
ただ、着眼点が悪い。悟志は純真であると同時に前向きである。ポジティブな奴である。文月の側にどんな理由があったにせよ、彼にとって「きっつい一言でばっさりと切り捨てられなかった」ことは非常に大きな意味を持つ。

すなわち、文月にとって自分は、他の男と違う存在だ、と、そう受け取ったのだ。

変な情けをかけるから悪いのだ。

黄金週間も目の前に迫る四月下旬の昼休み、軽い足取りで悟志は一年一組を出る。その手には弁当箱。いつも一緒に昼食をとっている男子生徒の一人が、どこへ行くのかと悟志に言う。
彼は振り返り、鼻の下をすこし伸ばした満面の笑みで、

「昼食に文月さんを誘ってくる！」

男子生徒だけではなく、文月を知る教室中の生徒が口をあんぐり開けて彼を見つめた。
悟志はそんな視線も気にせず、いってくる、と手を振って教室を出る。廊下を歩く生徒たちは一年三組へと向かう彼の異様なテンションに訝しげな視線を向けるが、もちろんそんなのも気にしていない。

可哀想なくらいのポジティブで小さな背中はひとまず見送ることにして、窓の向こうへと目を転じる。

目下に広がるグラウンドには、桜緑学園野球部が今年の夏こそ甲子園、と気合を入れて昼連をしており、端っこでは元気の有り余る

男子生徒がサッカーをしており、グラウンド周囲の雑木林ではお弁当を広げ談笑する女子生徒の固まりがあちこちに点々としていて、

それをぼんやりと屋上から見つめる、木下椋と陰満文月の姿があった。

高月市の金のかけ方はすごい。県立で中高一貫は珍しいと想うし、左を向けば学校の西隣に水口総合病院という馬鹿でかい病院がある。おまけに少し歩いたところにある公園も噴水があったり無駄に広かったりする。

異常だ。

コンビニの袋から紙パックのアップルティーを取り出し、飲みながら文月は思う。

最近はやたら男からのアプローチが多い。昨日の豆っこいのもそうだし、今日は陸上部期待のエースとやらから昼食のお誘いが来た。

丁重にお引取り願った。

高校に入ってから翔太も椋も自分の過去を話さないので、外見のイメージそのままが他人に広まっているのだが……。どうしてこう、男と言うのは単細胞なのか。中学を卒業してそんなに経たないのに、環境が変わるだけで自分も変わった気がして、高校デビューでもしようというのか。救えない。

本来ならば告白されるのは光栄に思うべきことなのだろうが、なかなかそう簡単にはいかなかった。

一気飲みしたせいか、アップルティーがすぐになくなってしまっ

たことを後悔しつつ、おにぎりをコンビニ袋から取り出したとき、椋が金網の向こうのグラウンドをぼんやり見たまま微動だにしないことに気づいた。

「どうしたの？　椋」

彼女は振り返り、

「……え？」

「なんかずっとぼんやりしちゃってさ。昨日のコと一緒に帰ったときになんかあった？」

椋はふるふると首を横に振る。

「なにもなかったよ。いつもの通り。そうだな、今日は喫茶フルールのデラックスパフェがいいな」

違和感。

親友と呼べる存在だからこそ、見過ごせない何か。

「……無理には聞かないけど。辛いことがあったら吐き出す方が楽よ。というか、そうしてくれないと私が気持ち悪い」

「……あのね、その」

椋はそれでもまだ口をもごもごさせてちらちら文月を見たり、視線をそらしたり落ち着きがなかった。どうしようもないので金網に背中を預け、彼女の言葉を待つ。

これだけ言っても言わないのなら、それだけ重大なことなのだろう。

腕時計を見ながら待つこと三分と十秒、ようやく椋は文月をまっすぐに見つけて、こう言った。

「文月はさ、緋水さんのこと、どう思う？」

心を読まれたかと思った。

不意打ちをくらったかと思った。

「――え」

一瞬動揺したが、椋にエスパーな力があるはずないと思い、一撃を食らった頭を奮い起こして先ほどの椋の一言を咀嚼する。

しかし、たったこの一言で動揺するとは、余程自分は緋水杏子に関心を抱いているのか。

「…どうしたの？」

椋が首を傾げて問いかけるのを「なんでもない」とすり抜ける。

面倒なことになったのは判る。椋の嫉妬癖が始まったのだ。

椋は文月よりも勉学に優れていて、内気で大人しそうな雰囲気から実は隠れファンとやらが結構多い。男子相手の話術にも長けているらしく、文月にこっぴどく振られた男子を聖母のように優しく包み込む気遣いをするせいか、文月から椋へころっと心変わりして熱烈なアタックをした男子もよくいるくらいだ。

が、そんな彼女の悪い癖が自分より「出来る人」のことを素直に受け入れられず、果ては嫉妬してしまうということである。

あくまで短期間的なものなのだが、本人にそれと自覚がなく、二

人でいると絶えず愚痴を聞かされる身である文月にとっては、困った癖なのだ。

故に文月は、その「短期間」をさらに短くするために様々な努力をする。例えば対象人物のことは嫌いではない、という意思表示をしたり、対象人物のよい部分を彼女に語ってみたり。

告白されたときと同じ。椋からのこの質問に答えるかで、今後が決まる。

どう答えるか。

そんなことを考える意味もないくらい、答えは決まっていた。

「嫌いよ私。ああいう完璧人間、気持ち悪くて反吐が出るほど嫌い」

<ブルーな気分>

迷いも臆面もなくきっぱりと言ってのけた文月に、椋は面食らった顔をしていた。

「……珍しいね、文月がそんなきっぱり人のこと嫌い、なんて言うなんて」

「私だってね、嫌いなものくらいあるのよ」

「そうだよね、文月だって人間だもんね」

ころころと笑う椋に文月は眉根を寄せる。

「……アンタね、私を何だと思ってるのよ」

「陰満文月」

「怒るわよ」

「相変わらず冗談通じないなぁ」

そう無邪気に笑う椋に、緋水杏子への嫉妬心は欠片も見受けられない。つくづく思うが、彼女に嫉妬心などという負の感情があるのはなんか「いけない」ような気がする。

「ほら、文月って人と関わったり距離を取るのが多いほうだから、他人に対して感情を持つことあんまりないでしょ？　だから珍しいなぁ、って思ってさ」

なかなか鋭いことを言う。長い付き合いだけあって自分のことをよく判っている。もしかしたら自分より椋の方が陰満文月と言う人間のことをよく判っているのではないのだろうか。

そう思ったとき、お互い様なのだと自覚する。自分は自分だから

こそ、椋には椋だからこそ見えない部分というものが存在するのだ。一人で生きていたら発見できないであろう自分。
人付き合いに疎い自分でさえその大切さは判っているのだから、広い人間関係を持っている人はさぞ自分の事を顧みる機会をもてていいのだと思う。内心広い人間関係、と言うものに憧れていたりするのだが、面倒くさがりの性格が災いしてか、当分の間狭い人間関係は続きそうだった。

文月は青く、どこまでも続く広い空を見上げる。白い雲が海のほうに向かって伸びていた。
背中を預ける金網が、耳障りな音を立てる。

「……ま、久しぶりに他人に抱いた感情が嫌い、ってのもどうかと思うけどさ」

しかもまともに緋水美月と話したことさえないのだから、毛嫌いとか、食わず嫌いの部類に入る。
自己嫌悪に陥るつもりはないが、何とかしたほうがいいかもしれない。

「で、そのことを訊いてどうしたかったの？」
「特に何もないよ。そうだよねぇ、あんまり他人に興味のない文月に言ってもしょうがないよねぇ」

本気で自分の悪癖に気づいていないらしい。一度しっかりいってやるべきだろうか。
失礼な言葉を本人の目の前で吐きながら、椋は座って食べかけの女の子らしい弁当に箸をつけた。

「悪かったね、椋」

「？　何が？」
「なんでもないわ」
首を傾げながら昼食をとり続ける彼女に、笑顔で応対する。
自分と椋では、理由こそ違うけれど、「緋水杏子」が気に入らないという点で思いが共通した。
それだけで嬉しかった。
自分の反応はマイノリティだと思っていたので、同じ気持ちを持つ人がいて嬉しかった。
歪んだ思いなのかもしれないけれど。
友人っていいものだと、そう思った。
「――ところでさ」
椋は箸をくるくる回しながら、
「悟志くんね、全然諦めた様子じゃなかったよ」
「――悟志って誰？」
眉を寄せる。椋が男の名を言うなんて滅多にないし、文月が覚えている男の名も極端に少ない。覚えているとしたら父の名と翔太くらいか。
「ほら、昨日の告白してきた子」
彼女の言葉で、昨日の夕暮れが、純真な眼差しが、罪悪感がフラッシュバックした。

「……ああ、あの子ね」
「…もしかしてさ」

椋はジト目で文月を睨む。

「文月、悟志くんが同じ中学校出身だって、知らない？」
「――そうだったの？」
「そうだよ！　集会で受ける学校ごとに集まったりしたときに見なかった？　覚えてない？　悟志くん、小さくてプリチーだから結構女子にも可愛がられてたんだよ？」

こめかみに人差し指を当てて記憶をひっくり返してみたが、まぶたの裏に浮かぶ風景に豆っ子の姿を見つけることはなかった。

「――ないわ。というか、あんな豆っ子に人気があるなんて方が驚きよ。耳を疑うわ」
「でも真実だよ。私も結構可愛いと思うけどな。帰り話してみたけど本当に純真で外見通りのイメージって感じだったし。あんな人いまどき女子にもいないよ」
「……私にとっては、あの豆っ子を可愛いと思う人の目と感性を疑うわ」
「失礼ですね」

どうやら目の前の彼女は感性を傷つけられたことに怒るだけではなく、文月の感性も責めているようだった。
―なぜあんなに可愛いのに、豆っ子などといって何の興味も持たないのか―と。

「そんなに私の感性を疑って、豆っ子のことを可愛いと思うならいつもみたいにオトせばよかったじゃない」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。別に好きでオトしてるわけじゃないから。毎回毎回困るんだからね、私は文月みたいにばっさりできないんだから」

だが文月と同じペースで男を諦めさせるのだからすごい。一体どんな手を使っているのだか。

「それに言ったでしょ？　悟志くん、文月のことまだ諦めてないって。…、いや、諦めててもオトすつもりはなかったけど」

突っ込みを恐れてか、最後の一言に予防線を張ってから、どうするつもり？　と椋は問いかけてくる。その質問の背後には、「昨日の時点でばっさりしなかったんだから、今更ひどい扱いをするなんて許さない」という視線が見て取れる。

文月はうざったそうに髪をかきあげ、

「……ま、なるようにしかならないわよ。さっきも言ったけど、私豆っ子に興味ないし」

と呟いた。

他人がどう思うかはどうでもいい。同調してくれる人がいるのはやっぱり嬉しい。

けれど、やはり大事なのは自分の気持ち。

緋水杏子は嫌いだし、豆っ子にも興味はない。

――ただし、面倒なことになるのは必死だが。

ため息をつく。

面倒ごと、や悩みの種、という言葉が嫌いな文月にとって、ここ数日は憂鬱なひと時になりそうだった。

<ひとり、ふたり>

小学校低学年の頃、驚くほど病弱だったのを覚えている。
通学より通院の方が多かったことも、外で遊ぶことよりベッドにくるまっていることが多かったことも。

たまに学校に行っても、自分は他と隔たりがある。そもそも他人と話すことすら滅多になかったし、同情して話しかけてくる人がいても、ほんの少しの会話の後、お互い愛想笑いを浮かべてそれでおしまい。
そんなことが何度か続くうちに、相手は自分を見限って、話しかけてこなくなる。

別にいい。
一人でいるのは嫌いじゃないから。

しかしそれ以上に、運動場に散らばる人たちの輪に入りたかった。花いちもんめをやりたかった。おにごっこをやりたかった。ドッジボールをしたかった。

せめて、教室で広がる輪に入り込んで、楽しくおしゃべりをしたかった。

あの頃の自分にはまだ無理な出来事だったのだ。

人付き合いの方法も知らないし、
いわゆる口べたというやつだったから。

友達、と呼べる存在を作って、遊ぶことに憧れた。

なんで自分はこんな体なんだろうと枕を何度濡らしたことか。

そんな複雑な思いを抱えたまま、陰満文月は小学四年生になった。

目の前の悟志を見て無性に頭がくらくらする。

いつかのように夕日が綺麗で、校門で、下校の時間だった。違うところと言えば椋がいるかいないかという点だが、その点については今は些細な問題だった。

「文月さん、一緒に帰りましょう！」

あの夕暮れの日みたいに誰も足を止めない。指をさされない。道行く人の目にもすでにこれは信号機や犬猫と同じような日常目に留まる一つの風景と捉えられているらしい。じろじろ見られるのも無性に腹が立つが、日常の風物詩の一つとして数えられるのも迷惑極まりなかった。

中間テスト前日。高校生初めてのテストということもあってか緊張も手伝い、いい感じに機嫌が悪いのにこんなのに付き合ってたらいつ爆発するか判らない。無視してさっさと歩き出す。

あの決意した日から今日の今まで二週間弱、まともな平和と呼べた日々はゴールデンウィークだけだった。悟志は昼食ごとに、下校ごとに文月の前に現れては一緒に食べよう帰ろうと誘ってくる。本心では断りたいのだが、椋が下手に可愛がるせいで断りきれないのだ。憂鬱な気分は次第に怒りに変わり、部屋のクッションをいくつだめにしたか判らない。

が、悟志にはっきりと「しつこい」というだけの怒りを自分に集

められるかといえばまた別の話である。悟志にひどいことを言えば、椋が黙ってはいない。周りが自分をどう思っているかは知らないが、文月にとって椋は逆らえない存在だ。普段内気だけあって、なおさら。

そんなだから今も出来ることなら喚き散らしてやりたかったが、ぐっとこらえて家路を急ぐことにする。

桜緑学園から家までの通学時間は約二十分。バスを使うときもあるが、乗り物に酔いやすい体質だし、基本歩くのは嫌いではないので一年の大半は徒歩通学である。

五分くらい歩いて、水口総合病院正面玄関門を過ぎ去ったくらいで立ち止まり、振り返ってみた。

六歩くらい後ろに悟志の姿。

目が合うと、無邪気な笑みを向けてきた。

ため息。

今日ほどバスを使えばよかったと思う日は今日までなかった。乗り物酔いと後ろにくっつかれる苦痛の二択で後者を選んだ自分の浅はかさを呪う。

無視して再び歩き出す。本当、今日に限って椋がいないのが悔やまれる。椋がいたら後ろにひっついている金魚のフンのことなど少しは考えずにすんだかもしれないし、もう少し心安らぐ下校が出来るはずだ。

どうしようもない怒りを悟志の代わりに椋にぶつけることで鬱憤を晴らしつつ、ずんずん歩き続ける。そのせいでいつもより速い歩調で下校していることに文月は気づいていない。

それにしても、椋が一緒に帰らないのは珍しい。いつもなら帰りホームルームが終わったら真っ先に自分のところへ来て、「文月、帰ろう」と誘ってくるのに、今日は気づいたらもう教室にはいなかった。なにをやっているのだか。

視線。

振り返る。

同じ距離の先に同じ笑顔。

思う。これはいわゆる、ストーカーの類ではないのだろうか。

「ついてこないで」

「そう言われても、家のある方向、同じだから」

「本当か嘘か判らないわね」

「本当です。文月さんの家からさらに三分くらい歩いたところにあるんです」

「……へぇ」

なぜか悟志は文月に対して丁寧語口調で、同学年なのに身長の低さも相まって年下に感じてしまう。

しかし今の発言からすると、家に帰るまでずっとストーカーもどきをされることになる。それは勘弁願いたい。

……仕方ない。

文月は機嫌悪そうに前髪をかきあげた後、悟志に向けて二本、指を立てた。

「……残念ながら、カメラは持ってないんですけど」

「頼まれても写真なんて撮らせないわよ。選択肢を二つ、あなたに

あげるわ」
「それはもう喜んで！」
「ひとつ、私の前を歩いて下校する。ふたつ、私の隣を歩いて下校する」
文月が言葉を言い終わってから約三秒後、悟志は少女漫画の勢いで目を輝かせ、そのまま猛スピードで走ってきて文月の隣についた。
「憧れだったんです。文月さんと一緒に帰るの。中学の頃からずっと」
「あ、そ」
残念ながら全く悟志のことなど知っちゃいなかったのだが。
どちらからでもなく歩き出す。物は試しというわけでもないが、椋以外の誰かが隣にいるだけでも結構落ち着いた。いざこうしてみると、悟志と椋の身長はそれほど変わらないようであるし。
ふと、悟志がこちらの様子を何度も伺っていることに気づく。視線をこちらに向けているのだが、文月が悟志を見るとすぐに逸らしてしまうのだ。
――純情な少女かっつーの。
椋が小動物系、とか可愛い、とか言った類の形容詞を使っていたことにようやく納得する。
ある意味、文月が経験したことのない初めてのタイプの人間だった。
六回くらい視線をそらされた後、文月をとうとう痺れを切らして問いかける。
「何か用？」

「え、いや、特に何もないですけどっ」
「けど？」
「えーと……」
なんか、こいつはいじめられれば味が出るタイプなような気がしないでもない。

<変わりゆく歩み>

「あのさ、あなたも男だったらひとつかふたつくらい女子を楽しませるような話題作りなさいよ」
「男女差別ってあんま好きじゃないんですけど、なんか正論っぽく聞こえます」

馬鹿にしているのかこいつは。
悟志は「話題……話題」と呟きながら唸っていたが、結局、

「好きな食べ物はなんですか？」
「……ありきたりすぎて、ため息つくことすらできないわ」
「……ごめんなさい」

しょげる悟志。やはりこいつは女子に可愛がられているというよりはいじられているのではないのだろうか。

「カステラ」
「え？」
「好きな食べ物。洋菓子が好きなんだけど、その中でも特にカステラは好きなの。あなたは？」
「ボクですか？　ハンバーグです。あ、チーズがのってるともっと好きです」

外見も子供なら中身も子供だった。狙って言ってるようにさえ聞こえる。

「文月さんは、なにかボクに聞きたいこと、ありますか？」
「ん……、そうね……」

自分で偉そうなことを言っておいて、実際男子とあまり話したこと無いから、みたいな理由で話題が作れないなどというのはどう考えても情けないだろう。しかし、ありきたりな話題を提供するのもまた、負けな気がする。

考えること文月が二十歩、悟志が二十三歩、彼女はようやく切り出した。

「私があなたに興味を持っていると、思ってる？」

文月の意地と性格の悪さが垣間見える質問だ。彼女は椋から経緯を聞いているわけだから、悟志は文月が自分に興味を持っている、と思い込んでいる。「イエス」と答えると確信している。

そんなわけないのに。

さらにともすれば、この質問から派生する会話次第で悟志を諦めさせることも文月になら可能である。おそらく、彼女はそれを狙って悟志にこの質問を投げかけたのだろうか。

だが、文月との下校で舞い上がってしまっている悟志にはそこまで深い意図は読めはしない。

だから、悟志は正直に言った。

「思ってないです」

「――え？」

予想外の答えだった。

だって、それならなんで。

文月は足を止めそうになってしまったが、悟志はそれに気づかず彼女より狭い歩幅で歩きながら「今は」と付け加えた。

「今は、って」
「そうですね、最初はちょっと期待してました。告白したとき文月さんの様子が少し変だったので。でも三日くらいご一緒させていただいて、すぐに勘違いだと気づきました。当たり前ですよね、あの文月さんが、男子に情を与えるなんてありえないですもんね」

悟志の中の陰満文月像は、どんな感じなのだろう。ろくなイメージがないような気がする。

「……少し、いや、かなり残念でしたけど」

そう言ってどこか遠くを見つめる悟志は、まっすぐな子供の心と、大人の心が入り混じった姿だった。

「それでも」

悟志は文月を見る。

「ボクにとって、文月さんは仲良くなりたい人だったから、何かの縁だと思ってちょっとがんばってみようと思ったんです。…迷惑でした？」
「…まぁ、うん、かなり」

こういうときに嘘をつけない自分が痛い。何も言わず、何も告げず、静かに首を振ればそれだけで悟志の心は安らぐのかもしれないのに。

「ごめんなさい。……でもボクは、文月さんのことが好きだったんです。ずっと」

「理由になってないわよ」
「でも、そうとしかいえないんです」

沈黙。
いつの間にか、悟志の話に聞き入っている自分がいることに文月は驚く。

「広い世の中、出会うすべての人と仲良くなろうって思っても無理ですよね。馬が合う人と会わない人がいるんですもん。でも出会う人たちの中に、絶対仲良くなりたい、話してみたいって思う人はいます。ボクはそういう人と仲良くなるための努力は惜しみません。……努力しな買った後の後悔より、努力した後の後悔の方がかっこいいですし」

それは、文月にとって、一番足りないもの。

「文月さんはその中でも、特別に仲良くなりたかったんです。見て、聴いて、話して、触れ合いたい……。それが好き、っていう感情だと、そう思うんです」

夕暮れの路上で、二人並んで歩く路上で、悟志の声が風にのっては消えていく。文月は何故か消えていく声を逃さぬよう、真剣に聞いていた。

「なんか、えっちぃわね」

口だけは真剣になりきれなかったようだが。

「……うーん、ボクも男ですし、多少えっちぃかもしれませんが」

正直、人を好きになることなど、どうでもいいと思っている。それは昔から思ってきたことで、今も同じ。
ただ、悟志に言わないほうがいいと思ったし、言うつもりもなかった。
豆っ子は豆っ子なりによく考えているのだから。

「――あなたの意見は、よく判ったわ。いい暇つぶしになった」
「そう言ってもらえると嬉しいです。…あ、あの、それでですね」
急に悟志は先ほどの雄弁さとは一転、口をもごもごさせて文月を上目遣いに見る。

「……なによ」
「ご迷惑でなければ、これからも一緒に昼食をとったり、一緒に帰ったりしていいですか？」

迷惑だって、さっき言ったのに。
文月は前髪をいじりながら、沈み行く夕日を眺める。
断るのは簡単だ。いつものことだ、慣れている。
だが。

「――しょうがないわね」

自分でもどんな心境の変化か判らない。
人を、特に男子を今まで拒んできた心が、悟志に限って緩んだような感じだった。

「ありがとうございます！」

悟志は小躍りをして小走りして、T字路で一回くるりと回った。
普段女子から可愛がられているからなのかどうか知らないが、仕草がいちいち女性らしい。

「じゃあ、ここでお別れですね」
「え？　……ええ」

後まっすぐに少し歩けば文月は家に着く。悟志はT字路を左にでも曲がるのだろう。

「さようなら、文月さん」
「はいはい」

去っていく悟志をぼんやりと眺めながら、口元に自然な笑みが浮かんだ。

案外、悪い下校ではなかったかもしれない。

＜追憶トワイライト＞

お風呂に入っているとき、ベッドに潜ったとき、勉強しているとき、ふと思い返す。
それは、陰満文月にとって人生の転機。
それは、一生忘れることのない、大切な記憶。

体育館前に貼られている新しいクラスを掲示された紙から、自分の名前を探し当てる。

三年二組六番の陰満文月は、四年三組七番陰満文月になっていた。
頭の中で何度も自分のクラスと番号を反芻しながら昇降口に靴を入れ、上履きに履き替えた。
目の前を、仲の良さそうな女の子二人組が通り過ぎた。

「ちぃちゃん何組？」
「二組だよ、りーやんは？」
「私は三組。違うクラスかぁ、残念。でも隣のクラスだね！」

二人は文月のことを気にもせず笑いあいながら階段を上っていってしまった。
――あんな風に友達と話し合いながら教室に向かえば、自分のクラスと番号を忘れることなどないのだろうか。何度も口ずさまなくてもいいのだろうか。
胸がちくりと痛む。二人のうち、ちぃちゃんと呼ばれていたほうは去年同じクラスだったのだ。なのに挨拶もなし。
いつものことだ。いつものことなのに、慣れない。

一人で階段を上り、一人で教室に入って席を確認する。　二列目の一番前。
ユウウツな気分は倍増する。いくら学校生活が他の生徒に比べて少ない自分でも、一番前の席は嫌である。六番にしてくれなかった先生が恨めしい。
どうしようもないので席に着き、周囲の新学期の興奮が入り混じった喧騒の中、一人ため息をつく。こんな日に陰鬱なため息をつく小学生なんて世界で自分だけかもしれない。……自分だけで十分だ。
時折思う。やはり自分は、日常から切り離されるべき存在なのではないか、と。
そんなことを思っていると、背中をつつかれる感触があった。振り向くと、ショートカットの似合う女の子が子供らしい笑いがあった。

「おはよう」
「お、おはよう」

彼女は、先ほどの二人組の、りーやんと呼ばれていた子であった。

「ふみづきさんも新しいクラスに友達いないの？」
「……私の名前は、ふみづきじゃなくてふづきです」

『新しいクラス』に限らず友達のいないことを知られたくなくて、間違えられた名前をまず訂正する。

「あれ、そうなんだ。でもふみづきとも読めるよね。きっと旧暦七月から取ってると思うんだけど、いいなぁ、綺麗な名前で。私の名前ね、お父さんにどんな由来かって聞いたら、画数が縁起がいいか

らつけたとかなんとか言ってさ。夢がないよね、夢が」

呆気に取られていると、彼女は手を差し出す。

「私、木下椋。よろしくね、文月さん」

「…よ、よろしく」

手を握り返し、ふと思う。

「もしかして、私の苗字、読めない？」

「…ばれちゃった？」

気まずそうに彼女は笑う。

それが、陰満文月と、木下椋の出会いであった。

木下椋は人と打ち解けやすい性格をしていた。

新学期が始まって一週間が経ち、朝教室に入ると男女問わず彼女の机の周りにはクラスメートがたかっていたものだ。

椋の席は文月の後ろの席だから、自然に文月も椋を取り巻く輪の中に入ることになる。入るつもりはなくとも、自分が登校すると椋は誰かとしていた話を途中で打ち切って挨拶してくるのだ。挨拶を返すといつの間にか輪の中にいて、話に加わっていたのだ。

話をして、話を聴く。

笑われて、笑って、笑いあう。

他の人にとってはごくごく当たり前なことなのだろうが、自分にとっては長年の夢が叶ったような気分だった。

だから、今このときを大切にしていたいと思う。

この体は爆弾だ。最近調子はいいが、いつまた体調を崩すか判らない。
体調を崩して、病院に通い始めたとき、ひと時の夢もまた、終わりなのだから。

夢の終わりは、ほんの一ヶ月後に訪れた。
あっけなかった。

「あれ？」

水口総合病院五階ロビーのソファで体育座りをしていると、彼女がやってきた。
朝食が終わり、ベッドにいるのは嫌なのだが何もすることもなく暇なので、ロビーにあるテレビで一人ニュースを見つめていたところだった。

「……瑠璃」

青のストライプのパジャマを着た深海瑠璃は、すべてを知った様子で文月の隣に座る。

「あなたも大変ねぇ」
「…瑠璃ほどじゃないわよ」

冷めた目で瑠璃を見つめる。入院したときに彼女に会うのはもはや日課だった。

「そう？　私は日常から完全に切り離されてるけど、あなたは違う。あなたは日常と非日常を行ったり来たりしてる。傍目から見れば、あなたの方が辛く見えると思うけど。…変な期待を持つ時点で

ね」

そう言って瑠璃は含み笑いをする。彼女が手を口に添えたときに、患者を識別する腕輪が見えた。

黒。

今までの長い入院生活の中で、黒い識別の腕輪をしているのは彼女一人しか見たことがない。　普通の入院患者のする腕輪は、血液型によって四つの色に分けられる。すなわち、赤、黄、青、白。自分はA型なので赤の腕輪をしている。

だが瑠璃のしている腕輪は黒。このことは、彼女がただの入院患者ではないということを示している。彼女はここの住人。自分と似たような立場にありながら、決して自分とは違う立場にいる人間。

まだ可能性がある点では、まだ諦めていない点では、自分の立場のほうが瑠璃より幾分かマシなである。

「……私は、別に期待なんかしてない」

「ホントに？」

瑠璃は文月の仏頂面を覗き込むように見つめてくる。文月はそれから逃れるように反対側に首を振る。

「……ホントよ」

嘘はついているつもりはなかった。夢はもう、終わっているのだから。

しかし瑠璃は相変わらずにやにやと笑いながら、「嘘ね」と言い切った。その反応に思わず彼女のほうを向いてしまう。

「隠さなくてもいいわよ、あなたの顔は何か期待してる顔だもの。ここの外に出ていた短い期間の中で、何か大切なものでもできたのかしら？」

ふと、椋の顔が頭を掠めた。

……私は、椋に何かを期待してるのか。

…まさか。

「そんな顔してないわよ。まったく、人をからかわないでほしいわね。まだ年端もいかない少女が偉そうに」

「あなたも同じでしょうに」

やがて瑠璃は飽きたのか、「んじゃね」と言ってさっさと廊下を歩いて消えていってしまった。一人残された文月は、先ほどの彼女との会話を思い出して口元を緩ませる。どうも瑠璃と会話しているとオトナびた口調と話の内容になってしまう。

深海瑠璃と最初に出会ったのは四年前のことで、まだ水口総合病院に慣れていない頃、まだ入院に慣れていない頃、学校と友人に希望を持っていた頃の話だ。

病室のベッドにいることが耐えられなくなって向かったプレイルーム。親と遊具や玩具で遊ぶ自分と同じくらいの子供たち。

遊ぶ子供たちの笑顔が光ならば、まるで蔭のように、瑠璃は廊下からプレイルームを冷たい目で見つめていた。

廊下を行きかう年寄りや看護師や医師たちは誰一人として彼女に声をかけない。日常の喧騒から切り取られた彼女を、当時幼かった文月は食い入るように見つめてしまっていた。その視線に気づいたのか、瑠璃は文月を一瞥して、こう呟いた。

『あなたも、一人なのね』

特に何も考えもせず、頷いてしまった。あれが始まり。

あれから病院内でたまに会っては年齢の割りに――自分より一つ年上の割りに大人びた発言をしている彼女だが、根本的な部分はあの日あの場所のプレイルームの廊下にあると文月は思っている。

彼女は黒い腕輪をしていて、年の割りに大人びている。

彼女は自由。

彼女は孤独。

そして瑠璃のことを振り返るたびに文月は自分の胸が締め付けられる思いをするのだ。

瑠璃は自分の鏡のような存在だから。

そんなことを言ったら彼女に否定されるかもしないけれど、きっと彼女も淋しいのだから。

その日から少し後、五月の末に、陰満文月の元へ訪問者が訪れる。

木下椋だった。

＜友情成立・揺るがぬ絆＞

文月の病室は四人部屋で、その時はちょうど文月以外誰も部屋にいない時間だった。

午後三時過ぎ。

窓の外に広がる芝生を無表情に見つめながら文月はただ時を過ぎるのを待っていた。

今日の天気は晴れ。明日の天気予報は雨。朝と昼と夜。病院のあちこちに埋められた木は季節ごとに様々な彩りを見せる。

「……夏、か」

夏はあまり好きではない。暑がりということも一つの理由ではあるが、もう一つは夏の幻ともいえる不必要な明るさに問題があった。

夏の日差しはただでさえ白い病室をさらに白く映し出す。無味乾燥に。文月の嫌いな色は白だ。白は病室を思い出すから。他の季節ならまだ耐えられる。春は桃色に、秋は紅く、冬は…、雪は白いから苦手だが、その分病室を暗く演出してくれるから夏ほど嫌いではない。

夏の日差しを見ると、夏休みでにぎわう外界の子供たちと、病室のベッドで過ごす惨めな自分の隔たりを感じるのだ。

この時期に入院したことを考慮すると、退院できるのは初夏が過ぎて本格的な夏に入る少し前。他の子達はプールで遊ぶ季節だ。無論、体の弱い自分はプールになど入ったことはない。それどころか、ドッジボールだって鬼ごっこだってしたことない。

激しい運動は駄目って言われているから。

気分が沈む。時間が過ぎるのを待つのにぼうっと考え事をするのはよくない。
ロビーに行って、テレビでも見よう。

そう思って文月がベッドから降りたのと、木下椋が病室の扉を開けたのはほぼ同時だった。

「あ」
「…えっ」

嬉しそうに顔をほころばせる椋とは対照的に、この状況が理解できずに体を強張らせてベッドから降りてスリッパを履く体制のまま動きを止めてしまう文月。

「よかった、大きい病院って初めてだから文月のところに行けなかったらどうしようかって思ったんだ」
「……どうして、ここに」
「？　お見舞いだよ？　別におかしくないでしょ？」

一瞬頭が混乱したが、すぐに理解する。昔できた友達も一応最初はお見舞いに来てくれたのだ。それが一日おき、三日おき、一週間おき――そして最後は来なくなる。
最初の一段階目だ。……少しくるのが遅いけれど。そう思って文月は心の平静を取り戻し、ベッドに戻って上半身だけ起こした体勢になる。

「この椅子借りるね」

椋は近くの丸椅子に腰を下ろし、床にランドセルを置いた。学校

帰りらしい。

「ごめんね、ホントはもっと早くお見舞いに来たかったんだけど、ちょっといろいろあって」

「気にしてないわ。入院するのも、一人でいるのももう慣れてるしね」

「…そうなんだ」

会話が止まる。病院と教室では世界が違うのだから当たり前の話なのかもしれない。それに自分自身がすでに教室での自分と違うのだ、椋が戸惑わないわけがない。

窓に目を向ける。

――結局のところ自分は、何も変わらないのか。せっかく学校で椋と友達になれたのに、自分の不甲斐無さのせいでまた一人ぼっちに逆戻りしようとしているのか。

そんなの嫌だ。

けれど。

「――文月さ、今までも何度か入院してたんだってね」

気まずい静寂を壊した椋を思わず見ると、ぎこちない笑みを浮かべる顔があった。

「ちーちゃんから聞いたんだ。去年同じクラスだったって言うし。ごめんね、別に何かしようと思って訊いたわけじゃないんだよ。ただあまりにも長く学校休んでて、少し気になったから」

恥ずかしさと気まずさを打ち消すためか両手を振り回して必死に弁明する椋に、小さく頷いた。今更興味本位で調べられてもどうと

いうわけでもないし、椋が嘘をついたことなど一回もなかったから。

「入院ってさ、大変だよね。一人で寂しくない？」

「あなたは本当に、ストレートに一番痛いところをついてくるわね」

「え？　あ、ご、ごめん」

明るさが空回りしている椋に苦笑する。そして静かに目を閉じて、今の彼女の質問を胸で反芻する。反芻するたびに胸の奥底が突っつかれて、なんだかくすぐったい。そして回想する。夕日を見ながら帰る家路でも、真っ白な白いベッドに横たわっていたときも、誰かと誰かの笑い声を聞いていたときも、公園で遊ぶ誰かを遠く見つめていたときも、瑠璃と話していたときでさえも、頑なに考えなかった思いを今文月は取り出してくる。

お見舞いに来た誰も彼も、自分を元気付けてはくれたが、ただそれだけだった。心配もされなければ、「大丈夫？」の一言もない。寂しいなどと聞かれた経験などもってのほかだ。

けれど、彼女は言った。

だからきっと彼女になら、言える。

「……寂しかった」

言ってしまえばただそれだけの言葉。

この言葉を、何でもっと早く、誰かに言わなかったのだろう。

「へぇー」

「……何よ」

「文月がそんなに素直に寂しいなんて口に出すとは思わなかった」

「失礼なこと言わないでよね」

まじまじと顔を覗き込む椋を真正面から睨み返す。

「だって文月のイメージって、そりゃ最初は漫画に出てくる清楚なお嬢様的かと思ったけど、ちょこっと付き合うとわがままお嬢様だって判ったからさ。なんかこう、一人でなんでもできちゃう！　孤高の狼結構！　みたいな」

なんかいろいろと違う。

「わがままお嬢様で悪かったわね」

「悪くないって。なんか我が道を突き進むって感じで、私には羨ましく見えたけど」

「どうだか」

「本当だって！　文月がどう思ってるか知らないけど、私は文月のこと好きだもん」

耳まで赤くなった。

「な、な、何を」

「何恥ずかしがってるのよ。あ、さては男の子から『文月さん、好きです』って言われたことないな？」

もちろんあるわけない。男子の友達だって結城翔太くらいだ。

「まあ私もないけどねー。でも告白されたところでどうということもないけど」

椋は顎に人差し指を当てて天井を仰ぎ見る。文月も一緒になって自分に好きな人ができたら、自分が告白されたらのときを考えてみたのだが、どうにもはっきりとイメージが湧かなかった。だから、

「好きな人とか彼氏とか、きっと遠い未来の話よ、きっと」
「確かにねぇ」

二人の笑い声が病室内に響く。やがて尻すぼまりに笑い声は消えていき、椋は立ち上がった。

「窓、開けようか？　暑くない？」
「気にしなくて平気よ、この病院、何もなくてつまらないけど生きていくには申し分ないわ」

椋はくるりと一回転して病室内を見渡して、率直な感想を述べた。

「……ホント、何もないね」
「でしょ。一日中ベッドで過ごしてなきゃ行けないから、外から得られる情報もこの窓から見る景色だけ」
「テレビとかは借りられないの？」
「借りられるけど…、あんまり好きじゃないのよね」

ニュースを見て自分より不幸な人がいると知るのもいいだろう、バラエティを見てひと時の笑いを得るのもいいだろう。情報番組を見て今の日本のことを知るのもいいだろう。けれどテレビを見終わって残るのは、どこか空しい気持ちだけなのだ。

「じゃあさ、良かったら学校の図書館で本を借りてこようか？」
「……え」
「あれ？　読書とか嫌いなタイプだった？」

違う。むしろ自分は読書家タイプだと思う。

「……でも、私読むスピード早いから」
「任せてよ、毎日だって来てあげる」
「……本当に？」
「大丈夫、安心して」

そう言って笑う椋の顔には、嘘偽りの陰は一筋も見られなかった。椋は窓に手をつけられるところまで歩き、眼前に広がる中庭を見つめながら、「こんな窓を世界の全てと見限るのは良くないよ。世界はもっと広いんだからさ」と呟いた。

今は嘘偽りがなくても、いつかは自分のところに来るのが面倒くさくなって、最後には来なくなってしまうのではないか、という不安はある。けれどここで断ったら、自分はただの馬鹿者であることは間違いない。

「じゃあ、お願いしてもいいかしら」
「がってん承知！」

拳を胸に叩きつけ、頼もしさをアピールする椋に、文月は思わず噴出してしまう。

心から笑ったことなんて、どのくらい振りだろうか。

それだけ自分にとって、椋という存在が新鮮だったのかもしれない。

陰満文月はきっと、木下椋のことが好きだった。

<死と生の先>

その後の話としては。
現在陰満文月と木下椋の仲を見れば自ずと判っていただけるだろう。

ただし、いくつか付け加えさせてもらうとするならば。
文月の体調が、成長するにつれてよくなってきた頃。
――正確には病院に全く通わなくなった、中学三年生の最初の頃。
深海瑠璃が、亡くなったことか。

彼女の家がこんなに大きいとは知らなかった。
喪服の変わりに黒いセーラー服を着て、文月は彼女の家の門に立っていた。
老若男女問わず、多くの弔問客がこの和風のお屋敷に集まっていたが、これほど奇妙なことはない。

なぜなら、生きている間、彼女は独りだったから。
人のことはいえないけれど、自分が病院に滞在している間、彼女が自分以外の誰かと談笑している様子など見たことがなかった。誰かが見舞いに来た姿すら見たことがない。
なのに今、これほど多くの人が押し寄せている。
奇妙なことこの上ない。

どうせなら、彼女が生きている間にこれだけ押し寄せればいいものを。

あまりにも人が多すぎて瑠璃のいる棺には近づけそうもなかったので、どこか疎外感を覚えた文月はふらふらと人の少ない縁側へと足を運んだ。

庭には漫画で出てきそうな池があったり、立派そうな植木が見える。

この屋敷の敷地だけで自分の学校の生徒一学年は外で遊べそうだ。

家がお金持ちで、瑠璃は美人でオトナびていたけれど、この世に滞在する期間が短かった。もう少し大人になっていれば、世の男を魅了するステータスの持ち主になっていただろうに。

どうやら天は二物を与えてはくれないらしい。

涙の代わりに、溜息がもれ出た。

我ながら冷たい人間だと思う。数少ない心を許した相手が、こんな早くに亡くなっているのに、目から雫一つも零れ落ちない。

縁側に座り込んで、人がまばらに歩く庭をぼんやりと見つめる。この庭は確かに豪華で、見る分には飽きないのだがしかし、人を憂鬱にさせてくれるみたいだった。――たぶん、単にこの庭にケチをつけたかっただけだ。

だが一応文月の心の中はメランコリックな状態だったらしく、彼の接近に気づきもしなかった。

「なんだ、居心地悪そうな顔してるな」

聞きなれた声に反応して振り返る。

結城翔太が、つまらなさそうに立っていた。文月と同じように学ランを着て。彼は文月の隣に腰掛け、「無駄に広い庭だよなぁ」と呟いた。

「あなた、どうして」

まさか、彼がここにいると思わなかった。瑠璃とは同じ病院だったが、同じ地区、同じ学校に通っていたわけじゃない。

「そりゃお前、俺が深海と知り合いだったからに決まってんだろ」

「……そうだったんだ」

「物事を自分の尺で計るのは良くないぜ、お嬢さん」

表情を全く変えない、純粋な嫌味に苛立ちを覚えたが、文月はそれを抑えつつ、

「いつ、知り合ったの？」

「男の子の秘密」

「どういう関係だったの？」

「男の子の秘密」

殴ってやろうかと思った。

「だけどまぁ、俺がここにいるのは義務みたいなもんだろうな。アイツにどう思われていたか知らないが、俺はアイツのことが好きだったし」

文月が彼の言葉を理解するのに、十秒間の間を要した。

「……へっ！？」

柄にもなく素っ頓狂な声を上げた文月を翔太は睨む。

「なんだよ」
「いや、なんだよって…。今なんて言ったの？」
「俺は深海のことが好きだった」
すると翔太は訝しげに文月を見つめて、
「何顔赤くしてるんだよ」
「……え！？　あ、いや……」
臆面も何もなく、真顔で言われるとこちらが恥ずかしい。翔太も瑠璃に負けず劣らず大人だと思っていたが、まさかここまでだとは思わなかった。今まで翔太とは恋愛関係の話なんてしなかっただけに、なおさらだ。
「いつ知り合ったの？」
「詳しくは覚えてないけど、お前を見舞いに行ったとき」
そうだ。忘れてはならないが、翔太は友人としては二番目に見舞いに来てくれた回数の多い人物だ。一位の椋とは回数に大きな差があるとはいえ、感謝をしなければならない。
「なるほどねぇ。私をダシにして、瑠璃に会いに行ってたわけか」
「――お前な。人聞きの悪い言い方をするな」
翔太はだらしなくあぐらをかいて、青く澄み渡った空を見上げながら、「あながち間違いでもないけどな」と聞こえるか聞こえないか位の声で呟いた。
「――ま、今となってはもうどうでもいいことだ」
「……」

そういう翔太の顔を見ることができなくて、文月は眼前に広がる庭を見つめることしかできなかった。

ゴールデンウィークを目前に控えた春の日。
瑠璃は、春の日が好きだっただろうか。
そんなことを話したことなんてなかったから判らないけれど、きっと彼女は興味を示さないだろうと思う。

瑠璃は自由だから。
瑠璃は孤独だから。

いつか言っていたように、きっと自分は世界から切り離された存在だから、と割り切ったに違いない。

どうしてだか、他に弔問客だってたくさんいるのに、隣に翔太だって座っているのに、自分だけがこの広い屋敷にぽつんと座っているような、奇妙な感覚を覚えた。

そして、そんな孤独に耐えられなくなって、隣を見ると翔太がいなくて。
庭を見てもさっきまでまばらにいた人影もなくなっていて。

気がついたら、目覚まし時計に手が乗った状態でベッドの上にいた。
窓の外で小鳥が鳴いている。
高校一年の、初夏の日の朝だった。

朝、いつものように登校すると、椋はすでに先に来ていて、一時間目の支度をしているようだった。自分も結構早くに来ているのに、ご苦労なことである。クラスにいるほかの生徒なんて、数えるほどしかいないというのに。

「おはよう、椋」
「おはよ……って、なんか顔色良くないよ？　風邪でも引いたの？」
「うーん、……少し気分が悪いけど、たぶん夢のせい」
「夢？」

椋は小さく首をかしげる。

「――ちょっといろいろ懐かしい夢っていうか、記憶を辿ってた」
「ふーん。そういうことがあってもいいかもね。温故知新って言葉もあるし」
「私の記憶はそんなに古くない」

彼女と同じように支度をして、もうすぐ中間テストだから英語の参考書の適当なページを開きながら、ふと昨日のことを思い出す。

「――そういえばさ、昨日早く帰っちゃったみたいだけど、何か用事でもあったの？」
「うん、ちょっとね」

椋ははにかみながら、「あ、仮定法だ。私仮定法ってあんまり好きじゃないんだよねー」と、文月の開いた参考書のページを真剣に眺めている。

様子が少しおかしい、と思えたのは付き合いが長いからなのか。

「……男？」

「ち、違うよ！」

そこまで本気になって言われると、ああ、嘘じゃないんだなぁ、と思いたくなる。別に椋に彼氏ができようが、椋の個人的な問題なのだから何も言うつもりはないが。

「あ、おはよう緋水さん」

クラスの男子の挨拶に、文月と椋はそろって顔を上げる。

いつものように、箱入りお嬢様のように緋水杏子が男子に挨拶を返して、席に着こうとしているところだった。

――なんでいちいち反応しているんだ、私は。

ちいさくかぶりを振って、参考書に目を落とす。すると、今まで話しかけていた椋の会話がぴたりととまったのでどうしたのだろうと椋を見ると、彼女の視線の先が緋水杏子へとずっと注がれていることに気づく。

その目に、主だった感情がない。

後になって、文月は思う。

このときに気づいておけばよかったと。

そして時は一月後。

中間テストが終わった後、緋水杏子へのいじめが始まった頃まで急加速する――。

＜いびつな日常＞

文月にとってテストの結果というのはあまり興味がなく、今後自分の将来をどうするかについての指針でしかなかった。これまでの経験から自分は文系教科に精通しているということ、どうやら他の人より少しは勉学ができること、それだけが彼女がテストの結果から得る情報であって、詳しい点数などはどうでもよかった。しかし椋は文月の成績を見るたびにぶーぶー愚痴をいうのだ。

文月は家で勉強してないのに勉強ができてすごい、だの。
文月は努力型じゃないからいいよねぇ、だの。
もっと勉強すればできるのになんで勉強しないの？　だの。

椋の方がもっと勉強できるくせに。

だから彼女はいつも椋にこう切り返す。
『将来、法学を勉強したいのだから、いつかどうしても成績を伸ばす必要性ができたら勉強するわよ』と。

はっきり言って、あまり仲良くない人が聞いたら嫌味にしか聞こえない。
なぜなら一学期の中間テストで、文月は緋水杏子より、木下椋より良い成績をとってしまったのだから。

中間テストの結果が戻ってきてからの初めての月曜日、文月が教室に行くと、いつもと同じ時刻に登校しているのにも関わらず、普段の二倍くらいの生徒が教室にいた。今日は何かあっただろうか、

と支度をしながら頭の中を一回転させるが、何も出てこない。
が、隣の男子生徒の輪から、笑い声とともに「どうだったどうだった？」「いやぁ、俺たぶんツイツイだわ」「もう早起きは嫌だから結構勉強してきたし、イケてる」という会話が聞こえてきた。

――なるほど、数学の追試か。
数学のテストが帰ってきたとき、教師が「５０点未満は追試！」と黒板に書いたときのクラスで湧き上がった阿鼻叫喚を思い出す。
椋も文月も５０点以上だったのでそんなこと会話に出ることもなく、すっかり忘れていた。

「おはよう、文月。今日はたくさん人がいるねぇ」

文月の登校より遅れること五分、椋がいつもと同じように自分の席に着く前に文月の席にのんびりとやってきて、文月と同じようになんでこんなに人が多いのか理解できていない様子だった。

「今日は数学の追試だったらしいわよ」
「あ、あーあー、数学の先生が言ってたしね。今日だったのかぁ」

椋は他の人と挨拶しながら自分の席に荷物を置きに行く。ふと、その目が教室のある一点を一瞥する。

――その先には、緋水杏子。

いつからいたのだろう。今日は余りある存在感を感じさせなかった。心なしか顔色が悪く見える。

その顔が少し俯いている。悲しげな動作でさえ雅やかに見せるなんて、やっぱり憎たらしい。

「文月、緋水さんがどうかしたの？」
「え？」
どうやらそんなに注視していたらしく、文月は椋に指摘されて初めて顔をあげる。
「なんでもないわ」
「そう？　文月、緋水さんにゾッコンだからなぁ」
ふふ、と口元を緩める椋に、文月は断固として言い返す。
「そんなことないわよ。空恐ろしいこと言わないでちょうだい」
「そんなことあるって。だって文月、最近恋する女の子のように緋水さんのこと見つめてるよ。私しか気づかないけどね」
誇らしそうに彼女は言う。
他人にしか判らない自分がいる、という意見には概ね同意だが、それにしても勘弁してほしかった。
「それにしても、緋水さんちょっぴり元気なさそうだね。なんかあったのかな？」
ちらりと目を配らせる椋に文月は言う。
「さあね？　今まで良かったテストの結果が悪くて親にでも怒られたんじゃないの？」
☆
夕方、授業が終わり、帰りのホームルームに差し掛かったところ

で、文月は何かがおかしいことに確信を持ち始めていた。

一つ目、緋水杏子のこと。

二つ目、木下椋のこと。

二つ目はまだいい。最近椋が自分と一緒に帰る回数が減ったり、中学時代に比べてほとんどべったりしなくなっただけだから。新しい友人ができるというのは良いことだし、毎日一緒に帰る、と約束したわけではないので、本来ならば椋がどこで何をしようと椋の勝手なのだ。

しかし問題は一つ目である。自慢ではないが、入学式を終えて同じクラスになってからずっと、文月は緋水杏子の背中を気がつくと見つめている。まるで椋の言う所の『恋する女の子』の如く。

その自分が言うのだから間違いない。今日は誰も緋水杏子のノートを見せてもらおうとしなかったばかりか、話しかけた者すらいなかったし、緋水杏子は緋水杏子で授業の合間休みも昼休みも、ほとんど一人で席に座り、俯いたり授業の支度をしたりするだけであった。

何かがおかしい。

「それはですね、きっと杏子さん、いじめられています」

悟志はさらりと、文月の疑問に答えた。

いつもの帰り道だった。あの約束を取り交わした次の日、悟志はわざわざご苦労なことに、自分と一緒に帰るために帰りのホームルームが終わるなり「文月さん帰りましょう！」クラスに飛び込んできた。クラス中の注目は浴びるわ椋や翔太には冷やかされるわで散

々だった。それからというものの、約束を「一緒に帰ってやってもいい。但し学校を出てからにしろ。そう、水口総合病院の入り口のすぐ近くにある電柱がいい。そこで自分が来るまで待っていろ」に訂正し、あまり気分の乗らないまま家路を毎日歩いている。

「……いじめ？」

「そう、いじめ。文月さんも一度や二度くらい関わったこと、ありませんか？」

毎日毎日当たり障りのない話題で帰っていたのだが、今日はふとしたことから感じてしまった疑問を口に出してしまった。そこで、あまり頼りにはなさそうだが悟志の意見も聞いてみることにしたのである。

「……見たことはあるけど、残念ながら加害者にも被害者にもなったことはないわ」

「見て何も行動しなかったら、それは加害者と同じなんですよ、文月さん」

「…あんたは私を怒らせたいの？」

「そんなことありません。僕はただ事実を言っただけです」

悟志の声は、一つ芯が入っていた。反論の余地を許さない声だった。

彼は豆っこいナリをしていながら、なかなか頑固で、自分の意見をしっかり持っている。椋と似ている。彼女はもっと柔らかく否定するけれど。

「……まあいいわ。続けて」

「これはあくまで文月さんの話を聞いての僕個人の意見です。吹聴しないでくださいね。でも、確信はあります。おそらく文月さんは

そういうものに参加しない、と周りから思われているせいで知らないんだと思います」
「なんだか、私までのけ者にされているみたいじゃない」
「ええと、極端に言うと、そういう話ではありますよね」

悟志の頭のつむじを思いっきりたたく。すごくいい音がした。

「な、なんで殴るんですか……」
「不愉快だからよ。特にあんたに言われるのはとても不快」
「ひどいです…」

悟志は今にも泣き出しそうな声を出すが、謝るつもりなど毛頭ない。この豆っ子は、こうして女から無意識的にしろ意識的にしろ、支持を得てきたのだ。なんだかそれも気に食わなかった。

叩いてすっきりしたところでふと思う。

「じゃあ、このことは、椋と翔太は知っているのかしら……」

ぼんやりとした独り言に近いものだったが、悟志は律儀に反応して、

「ええと、結城くんはどうか知らないけど、椋さんはさっきの話の流れ的に知らなかったんじゃないですかね？」
「そう……よね」

確かにそうだ。今朝、椋は緋水杏子を見ても邪な感情など抱いていないようだった。
椋と翔太が知らないだけでも安堵した。決して自分だけのけ者にされていたわけではないことで安堵したわけではない。

だが、心のどこかに不満感が残っている。

なんだ、この感覚は。

「文月さん、難しい顔していますね」

「そんなことないわ」

「僕が話しかけるまで、眉間にこう、しわが寄ってましたよ」

「……もう一度殴られたいみたいね」

「椋さんを疑っているのではないんですか？」

足を止める。

「……何を、馬鹿なことを」

「そんな馬鹿なことをいった覚えはありません。これも僕個人の意見なので真に受けないでください」

「……私の大切な友人を悪者にする人の意見なんて、聞けるものか」

文月は憤然として、悟志を置いていくつもりで大股で歩き出す。

「いいんですか？」

後ろから声が聞こえる。

「その大切な友人を、疑ったままでいいんですか？」

後ろから声が聞こえる。

「どうせなら、馬鹿なことを言った分らず屋に、友人の身の潔白を示したほうがいいんじゃないですか？」

文月は振り向く。

「どうやって？」

悟志は笑う。

「捜査の基本は現場百遍。今から、教室に行ってみると言うのはどうでしょうか？　――もちろん、文月さんが、馬鹿な僕個人の意見を全て信じているのなら、ですが。そもそも、いじめなんてないかもしれないわけですし」

文月は笑う。

「――上等よ。丸ごと信じてあげるから、何もなかった場合、土下座しなさい。椋の身の潔白くらい、私が容易く証明して見せるわ」

<信頼し続けること>

啖呵を切ったのはいいものの、心のどこかに不安感が募るのは否めない。

『大体いじめには二種類あって、面と向って酷いことをする場合と影から酷いことをする場合があります。おそらく、今回のケースは後者です。いくらなんでも、あの緋水杏子さんに面と向かえる人なんていなさそうですしね……文月さん以外は』

学園へと引き返している途中で、悟志はそう推察した。無礼にも程があると思う。

確かに、自分は自身の苗字と違い、陰でネチネチやるよりは面と向って言いたいことを言う方が性に合っているわけだけど。

「ところで」

水口総合病院の入り口を過ぎ去ったところで、翔太は訊いてくる。

「もし、もしですけど、僕の意見が合っていたら、文月さんは何をしてくれるんです？」

「は？」

「ええと、これから何もないことを確かめに行って、何もなかったら僕は文月さんに申し訳ありませんでした、って土下座します。もう額を地面にこすりつけるつもりです。ですが、何かあった場合――文月さんがいじめられていて、かつ椋さんがいじめに深く関わっていた場合、何をしてくれるんですか？」

考えていなかった。

「そうね……。どうせ可能性の低い話。あんたの意見を何でもひとつ聞いてあげるわ」
「本当ですか？　判りました。何をしてもらおうかな……」

悟志はあくまで楽しそうに。楽しそうに、いつもより歩幅を大きくして、文月の前を歩く。歩くというよりはスキップだ。そのまま自分たちは吸い込まれるように学園の校門をくぐり、昇降口で靴を脱ぐ。

「当たり前ですけど、授業棟にはほとんど誰もいませんね」
「当然よ。部活やるんだったら相応の場所があるじゃない。文化棟とかグラウンドとか」
「ある意味、好都合ですね」

何が好都合なのか悟志は言わずにどんどん文月の教室に向かって歩いていく。途中の教室にはちらほら机に向かって勉強する人や雑談を交わす人が見えたが、文月の教室には、一年三組には果たして誰も残っていなかった。

緋水杏子の机の上には、花が活けられた白い花瓶が置かれていたが。

「――陰湿ですね」

その光景を見た悟志が最初に発した一言だった。

「残念だけど、全く同意見」

文月は教室へと入り、主のいない机の群れを冷めた目で眺めてか

ら、真っすぐに緋水杏子の机へと向かい、花瓶を取り上げた。

「どうするんですか？」

「なんだか胸糞悪いからどこか違う場所に置くつもり。どこがいいと思う？」

「そうですね、教卓なんかどうでしょう？　割と普通に見えると思いますけど」

想像してみる。確かに普通だ。高校の教室の教卓にしては少し不自然ではあるが。

文月は手に取った花瓶を教卓の上に静かに置いて、悟志の方を見た。

「……それにしても、一体これは、」

自分でも判っているのだが、自分の口から出すのは拒まれた。心臓の鼓動が速い。一回一回のリズムがひどく大きく、鼓動のリズムで頭がおかしくなりそうだ。

「……一体これは、どういうこと？」

「今日はもう、事後だったってことです」

事後。

悟志も口に出して言わない。が、彼の言っていたことは事実だったということだ。

少なくとも、片方だけは。

「明日は、もう少し早く教室に戻ってきましょうか」

「明日もやるの？」

「もちろんです。文月さんは椋さんの無実を証明するために、僕は

文月さんとの約束を果たすために、『誰が主だった人物なのか』を確認しなければなりません」

悟志はそう言った後に、「まあ、どうせなら僕が土下座する結果ならめでたしめでたし、なんですけどね」と付け加えた。

確かに、このまま馬鹿馬鹿しいと言って終わらせるのは簡単だが、終わらせてはいけないような気がする。先ほどの悟志の言葉が胸に刺さる。

――見て何も行動しなかったら、それは加害者と同じなんですよ、文月さん。

自分は病院暮らしが長かったおかげで他の人より日々の学校生活を生き抜く技術は劣っていると思う。本格的に学校生活に戻った時からずっと、自分のことで精一杯で、悟志の言うように、クラスで何か揉め事があったとしても、自分に飛び火しない限りは主だって関与はしなかったのだ。

だが、今までがそうだったからと言って、今回も見て見ぬ振りをしないわけにはいかない。してはいけない。正義感でも何でもない。ただ『こういうやり方』が気に食わない。

やるんだったら正々堂々、面と向かって言いたいことを言ってやればいいのだ。

緋水杏子は人間味が欠けていて大嫌いではあるが、このやり方は間違っている。

「――そうね。私も是非あんたが床を舐めるところ、見てみたいわ」

だから文月はこう言った。
「こんなこと」をした者を見つけるために。その者に物申すために。
椋の無実を証明するために。
「ええと、なんか僕の意見が間違った時の約束、酷くなってません？」
「気のせいよ」
荷物を手に、再び教室を出る文月を、悟志は嬉しそうに追いかける。

☆

次の日、文月が学校に来ると、ご丁寧なことに昨日教卓に移動させた花瓶が元の場所に――緋水杏子の机の上を果たして元の場所と言っていいのかは定かではないが――戻されていた。
しかしその事実は、表面に出すこともできない複雑な気持ちとともに、安堵を文月に与えることとなる。なぜならば、文月が教室に入ったとき、まだ椋の姿がなかったからだ。
だから、「あんなこと」をするのは椋ではない。
少し救われた気持ちになった。
「あんなこと」をするのは、今教室の中にいる誰かだ。そしてこの教室にいる全員が緋水杏子へのいじめを見て見ぬ振りをする。加害者だ。自分は違う。自分は陰湿なやり方など好まない。だからこうして昨日と同じように、緋水杏子の机の上の花瓶を手に取り、教卓の上におく。周りの目など気にしない。これが自分だ。はっきり

とクラスの中に蔓延する空気の一部分などでは、決してない。

私は、間違ってなどいない。

――お前って、緋水杏子と同じくらい、クラスで孤立しているよな。

昨晩、結城翔太はそう言った。

まだ家に帰っていないらしく、学生服姿だった。

突然家まで訪ねてきて、余程大事な用か何かかと思ったら。

そんなこと、メールか学校で直接言えばいいのに。

――私がわざわざ玄関口にまで来てあげたのに、最初の一言がそれ？

――俺とお前の間柄で、『こんばんは、今日も月が綺麗ですね』なんて挨拶しなきゃならないのかよ。そんなめんどくさい関係だとは思わなかったぜ。

額に手をやり天を仰ぎ見るなどというわざとらしい驚き方をされる。

こいつは自分をからかっているとしか思いない。そうなると腹が立つ。

――……。

――わ、まてまてドアを閉めるな！フェードアウトするんじゃねぇ！いち男性視点の意見として、一言言っておこうかと思ったんだよ。

――何を？

――椋の周りにいるやつらには気をつけろ。

――え、

心の中を見透かされたようで、柄にもなく同様を顔に出してしまったように思う。

――俺は今日自慢じゃないが三時間しか学校になかった。お前は何時間いた？まあいいや、どうせたかが二倍か三倍だろう。でもな、いいか？　普通の学生の二分の一か三分の一しか学校にいなかった俺でもよくわかる。緋水のお嬢様はどうやらクラスの奴らからよろしくない待遇を受けているみたいだし、椋は変なやつらとつるんでいるのを見た。

思わぬところから、……思わぬところから、できれば明日の夕方まで引き伸ばしにしておきたかった出来事の情報を聞いてしまった。翔太はいつもこうだ。普段は飄々としているくせに、いざ自分が大事な局面に立たされると、言ってもいないのにやって来る。

感謝はしたいが、今まで感謝の言葉は一つも言えていない。

――判ったわ。大丈夫よ、私も似たようなことを考えていたから。

――そうか。……今のお前は昔のお前と違って、一人でも大丈夫なのかもしれない。けどな、例え椋が何をしようと、長年ずっと連れ添ってきた親友なんだから、許してやれよ。

表情一つ変えずに翔太は言う。

――何その言い草。まるで何か知っているような雰囲気ね。

腕を組んで問い詰めようとする文月に、翔太はポケットに入れていた携帯を取り出して、背面ディスプレイに一瞥してから、ニヒルな笑みを浮かべる。

――さあな。男の子の勘ってやつさ。深い意味はない。これから用事があるから、じゃあな。

文月の返事を待たずに、翔太は手ぶらの学生服のまま、遠くへ走り去ってしまった。

こんな時間に、何の用なのだろう。文月は首を傾げたが、すぐに思いついた。男の付き合いなのかもしれないし、ただぶらぶらしに言っただけなのかもしれない。結城翔太はそういう人物だから。けれど、

今日は、深海瑠璃の、月命日だ。

文月は油断していた。

「あんなこと」をしたのが椋ではないと聞いて安堵してしまったのだ。

昨晩、結城翔太とこんな会話を繰り広げたにも関らず。

だから、夕方まで、おそらくその時まで、気づかなかった。

後になって考えてみれば、頭のどこか隅っこのほうで違和感は感じていたと思う。今朝軽く挨拶しただけでほとんど話さなかったのも、昼食を一緒に食べなかったのも。翔太の話を聞いていたのだから、重要なピースであったはずだ。

最近ずっと一緒にいるわけではなかったし、とか、悟志が昼食に参加するようになった時から、「私はお邪魔なので楽しんでね二人

とも」とかなんとかいってそそくさと去ってしまうことが多かった、とか、言い訳はたくさんある。

が、結局のところ、文月は考えたくなかった。だから油断していた。

昨日より早い時間だった。

昨日はすでに夕日が教室に差し込んできていて、なんともいえない寂しげな空間を彩っていたし、文月と悟志が学校を出た頃には、運動部が帰り始めていた。

今日はその時間より早い。

文月と悟志は学園内にある第二図書館—授業棟に一番近い図書館—で待ち合わせした。

「今日は根気が必要ですね。できるだけ怪しまれないために、ベランダから見張りましょうか」

悟志は嬉しそうに提案し、文月はとにかく確認できればそれでよかったので悟志の好きにさせた。ベランダに座り込み、悟志が見張っている間、文月は体を体育座りの格好で小さくなっていた。

心臓がどくんどくんと音を立てる。

果たして今日は来るのだろうか？

どんなことをするつもりなのだろうか？

誰がやって来るのだろうか？

椋が……来るのだろうか？

翔太の言葉が頭の中で回転する。真っ暗な闇の中に、翔太の言っ

た言葉が、昨日の会話の風景が思い出される。あの時翔太は、何て言ったっけ。

思考の泥沼にずぶずぶと浸かっていた文月の肩を、悟志は軽く叩く。顔を上げた文月に、悟志は教室の中を指差す。ついに来たのか。数回呼吸した後、文月は覚悟を決めて慎重にベランダの中から教室を覗き込んだ。

木下椋と、見知らぬ男子生徒が立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8171a/

リトル・ガーデン

2011年1月5日14時41分発行